



上智大学 Sophia Open Research Weeks オンライン・シンポジウム

脱グローバル経済の未来を描く

—コロナ危機を通じて見えてきた新しい社会創生の可能性

Designing the Future after Globalization:

Reflections on New Social Practices in a Time of Pandemic

2020年11月21日

報告書

主催：上智大学グローバル・コンサーン研究所



2020 年 11 月 21 日 上智大学オープンリサーチウィーク

シンポジウム

**「脱グローバル経済の未来を描く
—コロナ危機を通じて見えてきた新しい社会創生の可能性」**

オープニング 幡谷則子（上智大学 IGC）	1
 第一部「市場社会から〈健全な社会〉へ—条件と可能性を模索する	
問題提起 1 「市民社会の自律性とローカルな力の可能性」 中野佳裕（早稲田大学 地域・地域間研究機構 次席研究員）	3
実践の現場からの学び 1 「被災地の女性たちの活動現場から、変化を起こす力を備えること」 石本めぐみ（ウイメンズアイ Women's Eye）	5
実践の現場からの学び 2 「里帰りしなくても安心して産み育てられる都市・東京にするために」 高橋孝予（助産師、「東京里帰らない人応援プロジェクト」代表）	8
実践の現場からの学び 3 「都市と農村がお互いを支え合う共生社会へ」 林良樹（NPO 法人うず代表、アーティスト）	12
問題提起 2 「地球の健康を考える」 中野佳裕	16
 第二部 パネルディスカッション「新しい社会創生の可能性」	
コメント「ブラジル都市貧困層とアマゾン先住民族による抵抗運動から学ぶこと」 下郷さとみ（ジャーナリスト）	19
パネルディスカッション 石本めぐみ・高橋孝予・林良樹・中野佳裕	24
参加者からの質問とフィードバック	29

2020 年 11 月 21 日 上智大学オープンリサーチウィーク

シンポジウム「脱グローバル経済の未来を描く—コロナ危機を通じて見えてきた新しい社会創生の可能性」

幡谷：皆さんこんにちは。シンポジウム「脱グローバル経済の未来を描く—コロナ危機を通じて見えてきた新しい社会創生の可能性」にお集まりくださりありがとうございます。3 月からおよそ 8 ヶ月、移動と対面に制約がかかる毎日で、今回のイベントもこのような zoom ウェビナーでの開催となりました。3 連休の初日にもかかわらずこのように大勢ご参加くださったのは、「コロナ禍の」という冠がつく企画が多い中で、「新しい未来を描く」というテーマへのご関心が高かったからではないかと思います。

申し遅れましたが本日の全体司会と、第 2 部でモデレーターを務めますグローバル・コンサーン研究所の幡谷則子です。どうぞよろしくお願いいたします。コロナ危機を通じて、様々な格差、排斥、不平等、社会の矛盾といったものが顕在化してきました。また、一層社会の分断が深刻化したことも、様々な文脈で私たちは目の当たりにしております。現状で感染拡大を食い止めるためになすべき事に集中することも必要ですが、「こうした状況に至ったのはコロナ以前の社会や経済の構造にそもそも問題があったのでは？」という視点に立つ必要もあると考えます。そしてコロナ前の社会や経済の仕組み、あり方に問題があるのならば、それを変えてゆく根本的な要素は何かを考える好機ではないかという思いから、本日のシンポジウムを企画致しました。

最初に簡単に趣旨とシンポジウムの流れについて説明させていただきます。脱グローバル経済を目指す、脱グローバル化の未来像を占うというのが本日の中心テーマです。

21 世紀、経済のグローバル化は私たちの生活を条件づけるものとして定着してきました。度重なる自然災害、原発問題、そして 2020 年にわかに世界中に広まったコロナ危機によって、グローバル経済に組み込まれた生産・物流・消費体系というものがいかに脆弱であり、それが大都市圏と地方の分断と格差を生んできたということを、今私たちは改めて認識していると思います。他方で日本ではコロナの前から常に多くの地域発の新しい試みが、これまでとは異なる社会と経済のあり方を模索してきました。今ある経済に矛盾があるなら、この仕組みを根本的に見直して新しい社会に変えていこうという発想は、地域発の実践や運動に関わる人たちの中に確実に生まれていると思います。

第 1 部でお話しいただく女性のエンパワーメントの活動を行ってきたウィメンズアイの石本めぐみさん、そして「東京里帰らない人応援プロジェクト」の代表で、助産師の高橋孝予さん、NPO うずの代表でアーティストでもある林良樹さんは、まさにそういった地域発のオルタナティブを実践してきた方です。

日本から世界の他の地域に目を向けても、市場中心主義のグローバル資本主義に対抗するもう 1 つの世界の可能性を目指す運動というのは決して少なくはありません。この「もう 1 つの世界は可能だ」という言説は 2001 年から開催されてきた世界社会フォーラムのスローガンでもありました。それを牽引してきたのは、南米ブラジルとフランスを中心とする南ヨーロッパの社会運

動です。

第2部では、ブラジルのファベラという貧困地区とアマゾン地域の先住民の活動を長年追ってきた下郷さとみさんに、彼らの活動から得られるヒントをもとにディスカサントとしてご登壇いただきます。

コロナ禍前にもあった市場中心主義的な社会のあり方をどう変えていくべきか、そして今 with または after コロナという時代を迎えて、まさに新しい社会の未来像を描いていく必要があると私達は考えます。本日は、身近にある脱グローバル化の動きの主体性をどのように強めてゆき、自然と人間の営みの関係をどのように健全なものに変え、地球を含むあらゆる生命をどのように維持させていくか、ということを皆さんと共に考えたいと思います。そして、こうした現状からどのように未来像を描いていくか、その議論の舵取りを脱成長論研究の第一人者であり、開発論社会哲学専攻の研究者である、早稲田大学の中野佳裕さんに問題提起という形でお願いしました。本日のキー概念はこの「脱成長論」と「地球の健康」になります。第一部でわかりやすく解説していただきます。グローバル化によって失われてきた人間の営みと自然との関係、そして関係性によって成り立つ経済というもののあり方を今一度見つめ、再構築させていくにはどうすればよいかということを本日は未来志向そしてポジティブ思考で議論していきたいと思っております。それでは、これから第1部「市場社会から〈健全な社会〉へ―条件と可能性を模索する」を始めたいと思います。中野佳裕さん、最初の問題提起をお願いいたします。

第一部「市場社会から〈健全な社会〉へ—条件と可能性を模索する

問題提起 1 「市民社会の自律性とローカルな力の可能性」 中野佳裕

中野：よろしくお願いします。まず、今日私が2回に分けてお話しさせていただくことになりませんが、全体を通して一貫したメッセージ、皆さんと一緒に考えていただきたいことがあります。それは、人間が健康に生きるためには社会が健康（健全）でなければならない、そして社会が健康（健全）であるためには地球が健康でなければならないということです。これまで人類は歴史の中で様々な社会生活を形成してきました。そうすることで地球の生命循環の中で集団として生存していく、そういうニッチ（生態学的居場所）を作ってきました。人間にとって、この地球の中で生存して行くためには、一方で自らの生存に適した環境を集団で作る自由が必要です。その表現形態が社会というシステムです。しかし他方で、有限の地球との折り合いをつける必要があります。地球の生命循環と人間の社会的営みの間の折り合いをつけていかなければ、種としての人間生命の再生産が続いていかないわけです。そのためには、何らかの形で自らの自由を自己制御する能力が、つまり節度の感覚とか限度の感覚というものが人間には必要となります。このような節度あるいは限度の感覚に支えられた生活づくりの能力こそが、人間の生存には必要だったわけです。

新型コロナウイルスに代表される動物由来のウイルス感染症は、人間の自由と節度の感覚との間のバランスが試されている、そういう出来事なのではないかと思うのです。感染症の世界史に関する様々な文献を見ますと、人類は農耕革命を契機に定住生活を始めた頃から様々な感染症被害にあってきました。けれども、感染症がいわゆるパンデミック（世界的流行）という形をとるようになってきたのは、産業革命以降の時代においてなんです。パンデミックの規模が拡大し、その頻度が増して行ったのは20世紀以降、特に第二次世界大戦以後のことです。現在私たちが直面している新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、一方では、人類史の中で一般的に確認される感染症拡大のパターンに沿うものがあります。現代産業社会のグローバル化と共に人間や物の移動が加速化し、都市開発の進行によって人口の過密化が生じ、同時にウイルスの宿主である野生動物の生息地が破壊されていきました。その結果、人間と野生動物が接触し、移動を通じてウイルスが感染する確率が高まっていきました。移動・人口過密・自然破壊という感染症拡大の三大条件が、新型コロナウイルスの流行においても確認されます。けれども、現在マスメディアの報道や論壇での議論を見ていると、これを単なるパンデミックと言わずに、コロナ危機だとかコロナ禍、英語だとクライシスと形容しています。それはなぜかと言うと、今回のパンデミックを契機に、現在私たちが依存している社会経済システムの様々な構造的問題が顕在化し、それが人的災害を引き起こしているからではないでしょうか。そういうシステム的な次元からこの問題を考えるときに、人間が健康に生きるためには、社会が健康でなければならない。そして社会が健康であるためには、地球が健康でなければならない——つまり、人間と社会と地球の間の相互依存関係についてもっと目を向けてみたいのです。

今お話したように、人間の健康と社会の健康と地球の健康は相互に依存している。しかし、

過去 40 年間に展開してきた経済のグローバル化は、その複雑で多様な生命循環を断ち切って、あらゆる生命やモノを商品化し、単一の市場原理によって統治しようとしてきました。その目的は際限のない経済成長を追求するためですね。もっと生産し、もっと消費することを命題とする消費社会のシステムがグローバル化していったわけです。その結果、地球の健康が悪化し、社会が健全さを失い、人間の健康も悪化するようになったわけです。

分かりやすい例で言うと、例えば私たちが普段食べている食べ物がそうです。20 世紀半ば以降、食糧を安く大量に供給しようとして食糧生産の工業化を進めていきました。化学肥料・農薬・抗生物質・遺伝子組み換え技術に依存する近代的な大規模畜産・大規模農業のグローバル化ですね。そのような大規模畜産・大規模農業を推進する多国籍企業によるアグリビジネスが、世界の食糧市場を独占するようになっていったわけです。その結果、環境ホルモンによる土壌汚染や水質汚濁が進んでいたり、一つ前の世代よりも栄養学的に劣る食べ物が普及したりするようになりました。工業化された食は、地球生態系や人間の健康に悪影響を与えるだけでなく、社会の健康も悪化させます。例えば、農薬や遺伝子組み換え種子を販売するバイオ企業に途上国の農家が経済的に従属するようになり、生活の自律性を喪失するという問題が挙げられます。また、仮想水（ヴァーチャル・ウォーター）の国際移動といって、先進国の家畜飼料用に輸出される途上国の穀物を生産するために、現地の水資源が大量に使用されます。それは結果的に途上国の穀物と水資源を先進国が搾取していることになります。つまり消費社会は、地球の健康と人間の健康を悪化させるだけでなく、誰かを犠牲にすることで成り立つ社会的に不公正なシステムでもあるのです。

その他、消費社会の特徴としては、グローバルな物流の発達が挙げられます。国境を越えた商品の移動の加速化によって大気汚染が広がり、また温室効果ガスの排出も増えるので地球温暖化も進みます。さらに、消費社会の中ではグローバルな価格競争が広がり、労働力の買いたたきも進んでいきます。労働市場の規制緩和が進み、不安定労働者が増加し、格差社会が広がりました。こうした環境破壊や格差の拡大というのが進んでいく中で、政治がどういう対応してきたかという、巨大企業の利権を支えていく政策を進めていきました。いわゆる民主主義からポストデモクラシーへという状況がつけられていったわけですね。本来は格差の是正や環境政策を進めていくべき政治が、全くそういう対応を行ってこなかった。その結果、地球環境破壊と格差社会化に歯止めがかからなくなってきた。そういう状況の中で、新型コロナウイルス感染症の拡大が起こったわけです。なお、以上で述べたことは、雑誌『世界』2020 年 8 月号に寄稿した論考「今こそ〈健全な社会〉へ」において包括的に分析しています。関心のある方は、是非ご覧になってください。

したがって、まずこの場で問題提起したいことは、今回のパンデミックを契機に私たちが直面している社会の様々な脆弱性は、パンデミック以前から既に存在していたものであり、それはひとえに消費社会を支えるグローバルな経済システムの構造的問題に帰趨するものではないだろうかということです。その上で、地球の健康を悪化させ、社会を不健全なものにし、人間の健康を悪化させる現代消費社会の構造的暴力をどのように是正していけばよいのかということを、登壇者の皆さんと考えていけたらと思います。

幡谷： 本日の登壇者は私も含めて 6 人ですので、登壇者全員がビデオオンにして顔を出させてい

ただき、一人ひとり順番にお話するという形で進めて行きたいと思います。では、次のセッションのトップバッター、石本さんにバトンタッチしましょう。ここからは、まず現場の声から聞こうということで、ウィメンズアイの石本さんからお話を頂きたいと思います。

実践の現場からの学び 1「被災地の女性たちの活動現場から、変化を起こす力を備えること」石本めぐみ

石本：ご紹介ありがとうございます。皆さんこんにちは。特定非営利活動法人ウィメンズアイの石本めぐみと申します。私は約10年前、東日本大震災の時にボランティアに行き、そのまま女性支援という活動に携わるようになり、それ以来、女性支援、女性のエンパワーメントを中心に東北で活動をしています。今日はそのエンパワーメントという事例を中心にご紹介をしたいと思っています。震災前は東京で、多国籍企業の金融会社で10年働いていたので、まったく違う世界に飛び込んだというバックグラウンドをふまえての話になります。今回はコロナ危機を起点にお話をしますが、日本でコロナ危機が大きな影響をもちだしてもう8ヶ月になります。このコロナ危機の混乱の中、私は個人的にはやはり東日本大震災当時のいろんな困難と重ね合わせて考えることがありました。当時を思い出すと本当に大変な状況に追い込まれているたくさんの人たちに私自身も出会いました。それは東北でもそうだし、東京も日本全国がいきなり、ある種、非日常になってしまっていました。情報も錯綜していて、常に不安を抱えていたのが9年前でした。こういう本当に不確実なことが多い中で、今まで当たり前だった毎日が、コロナの場合はだんだんと非日常になってしまった、そんな実感を私は持っています。この9年間の活動を思い浮かべると、どんなに深刻な状況であったとしても、目の前の課題を解決することに加えて、同じ課題を繰り返さないために、根本的なところの解決を自分達自身の、自分たちの足元から作っていく、その大事さをあの東日本大震災の時にも思いましたし、今回のコロナ危機でも思っています。そういうことを話したいなと思っています。

中野先生からの課題提供を受けて、人間の健全さ・社会・地球、ここはもちろん繋がっています。私は今回、健全な社会というのはどういう所から作られるのかということを少し考えてみました。二つ思い浮かんだのですが、一つは家の中から、もう一つは一人ひとりのエンパワーメントということが、私の今日のテーマになります。震災後に私たちは、女性視点・女性支援の活動をしてきました。震災当時は、女性支援だけではなく、子ども支援や高齢者の支援、障害者支援、いろんな支援がありました。その中の女性というのが今日たまたまご紹介することで、他にもたくさんあることを是非知ってください。

私たちは、当初は物資支援やサロン活動、避難所の支援などをさせていただいていたのですが、だんだんと皆さんが仮設住宅に移る頃には、安心して話せる場作りが大事だということを避難所でのヒアリングから思うようになり、人が集まる場づくりをしてきました。これまでにおよそ900回、のべ1万人以上の方が参加してくださっています。そういうことを積み重ねていって、2015年南三陸町で国際研修を開催しました。世界の女性リーダー10カ国15名と、宮城県・福島県・岩手県の3県の、若手の女性50名が集まる研修でした。私たちにとっては初めてのことで、資金

も集めないといけない、交通手配とか会場手配、ホテル手配などのやり取りもしないといけない、プログラムも作らないといけない、それこそ、この 50 名の女性たちを探し出さないといけないというところから始まったのですが、いろんな困難を乗り越えて開催に至りました。

ですが、最大の難関が何だったと思いますか？ちょっと考えてみてください。最大の難関は、女性が家を空けることへの無理解、あるいは反発みたいなものが起こったというところでした。では次の質問です。なぜ女性が家を空けることがそんなに困難だったのでしょうか？ヒントです。

「42 分」、「3 時間 35 分」。お分かりの方もいらっしゃるかもしれませんが、家事関連時間、つまり家事労働、介護・看護・育児および買い物に 1 週間に使っている時間を平均化したもので、男性が 42 分、女性が 3 時間 35 分というのが、平成 28 年のデータで出ています。つまりこの難関は、常日頃女性が家事をしている、料理もする、掃除も洗濯もする、子供の世話もするし送り迎えもしているのだけれど、宿泊研修で丸 2 日 3 日いない間、女性がそういうことをしないわけですね。それをどうするのかということが一番の難関だったのです。

さらに私たちが考える地域というものをデータでもう少し見てみると、家の中のことは社会にも影響していくわけですね。女性の自治会長は宮城県では 4.8%、市町村の管理職の女性は 18.6%。これも宮城の数字です。これは最新の数字なのですが、市町村議会の議員の方もまだまだ 10%と少ないです。日本全体で内閣府が世論調査したものによると、社会全体において男女の地位は男性の方が優遇されていると答えた男性の割合 70.2%、男性の方が優遇されていると答えた女性の割合 77.5%。どちらもそういうふうと考えているということが、こういう調査でも出ています。そういう状況のなかで女性のリーダーシップ研修などをやろうとしたために困難があったのですが、でもだからこそこういうことが必要なのだと改めて思いました。

変化を起こす力を備えるための、まさに第一歩だったのではないかと振り返って思います。実際その研修を行ってみて気づいたこともあります。そもそも東北のその地域では、女性が研修を受ける機会が非常に少なかったのです。「初めて研修に来ました」という人がほとんどでした。なぜかと言うと先程の話につながるのですが、地域活動や NPO の活動ですら、実際に活動されているのは女性が非常に多いのですが、代表となると男性が多いという現実がありました。そうすると、研修に呼ばれて行く人は男性中心になってしまい、女性はなかなか研修の機会がなかったのです。研修の機会というのはスキルアップをするだけではありません。研修に行ったらいろんな人と会います。自分の活動に近い人にも会いますし、そうすると仲間を見つけることができます。あるいは自分が今やろうとしていることを、ほかの地域では既にやっていて、実際の経験を聞くことができます。何度も研修に行くと顔を合わせているとだんだん親近感が湧いて、信頼できる仲間のネットワークみたいなものが出来てきます。そのほか、女性に関しては、地域の中で女性リーダーはすごく少ないので、地域の中だけでいると孤立してしまうんですね。そういうことも解消されるということが最初の研修をやってみて気づいたことでした。

それでこの女性のエンパワーメント「グラスルーツ・アカデミー東北」という研修を最初の 1 回目を突破した後も、2019 年まで 10 回開催して、総勢 100 名の方が参加してくださいました。このプログラム全体はどう作ったかというと、まず東北だと 3 日間、海外研修もやったので、その場合は 1 週間ちょっとの日程を組みました。集まって一緒に過ごしていくことが、志を共にする人たちと出会う場となり、その中で仲良くなって仲間ができる。自分の日常に帰ってもそんな

ネットワークができていて、連絡をとりあえて、何か次に地域の中でアクションする時にもお互いに応援し合える、そんなことを目指していました。

そんな中で気づいたのは、最初は女性という一括りで集めていたようなところもあったのですが、そうではないことです。女性の中にも多様性があって、女性だから子育てとか、例えば産後ケアとか、男女共同参画みたいな活動だけではない。聞いたこともないような活動をされている方もいて、全然違う分野の違う考えの人たちがお互い出会うことで、創発されていくものがあるのです。

彼女たちの声を聞いていると、伝統的な文化や慣習、性別役割分担が根強いことや、「いや女は家に居るもんだって言われて育ちました」ですとか、「子どもができると仕事を辞めるかパートで子育てしますよね」という風に、家の人からも会社からも言われるとか。みんなではないけれども、そういう人たちが多かったということが挙げられます。実際、そういう課題をどんどん私たちも聞きつつ、そこを直接解決していくことは非常に難しいけれど、そこを突破できる一人ひとりのエンパワーメントということがまさに大事なのだと思ってきました。そのエンパワーメントをどのように作ってきたかという点でヒントになるものがあつたらよいと思います。

そこで気づいたのは、内発性は凄く大事だということです。無理矢理やらされてもそれは表面的にやっただけにすぎず、湧き上がってくるものこそが本当に大事です。それは行動だけでなく、考えとか、意識とかそういうものですよね。女性たちが何かやろうと思ったら、「初めてのことだし」、「地域の目があるし」・・・などという恐れがすごくありました。その恐れをどうするか。彼女たちの不安を直接取り除くことはできないけれど、そこにどうやって私たちが寄り添うか、あるいは仲間と一緒に何ができるかを考えました。コミュニケーション力とか共感力は、女性たちは言わずもがなですごく得意分野でもありました。

あとはチームビルディングです。チームビルディングについては、考えるだけではなく、体験的にやってみて気づくことが多いですね。いかに安心して話ができる場を作るか。あとは失敗の共有。「失敗ってすごく悪いことだ」と思い込んでいるものを、「そうでもない、失敗から学べることってたくさんある」という文化をいかに醸成していけるか。そしてそういうことを共有できるお互いをいかに祝福し合えるかということが大切です。そういうことが出来て初めて、お互いに尊敬できたり感謝できたりするコミュニティを作っていけるのではないかと思います。

最後に「託児」についてです。私たちは、最初は託児サービスをつけていなかったのです。参加者の声を聴いて気づいたのが、「そうか。私たちが託児をつけていなかったために、子どもを預けることができないママたちは参加できてなかった。排除してしまっていた」ということでした。気づいてからは、3 日間の研修に完全に託児をつけて、夜は子どもたちとママたちと一緒にみんなでご飯を食べる、そんな研修にしました。そういう気づきからどんどん良くなってきたと思います。私からの共有は以上です。ありがとうございました。

幡谷：石本さんありがとうございました。中野さんの問題提起にあった「健全な社会」というものを、託児という問題とつなげ、また家の中からその健全なものを考えると言うことを女性のエンパワーメントという視点から示していただきました。それからもう一つ触れられた「共（きょう）」ということ、コモンというポイントも次の登壇者の高橋さんのお話に続く点だと思います。

ケアのローカル化であるとか、助産師というのは公でも私でもなく共の存在だというのが信条である高橋さんに、次は「里帰りしなくても安心して産み育てられる都市・東京にするために」というテーマでお話しいただきたいと思います。では高橋さんお願いします。

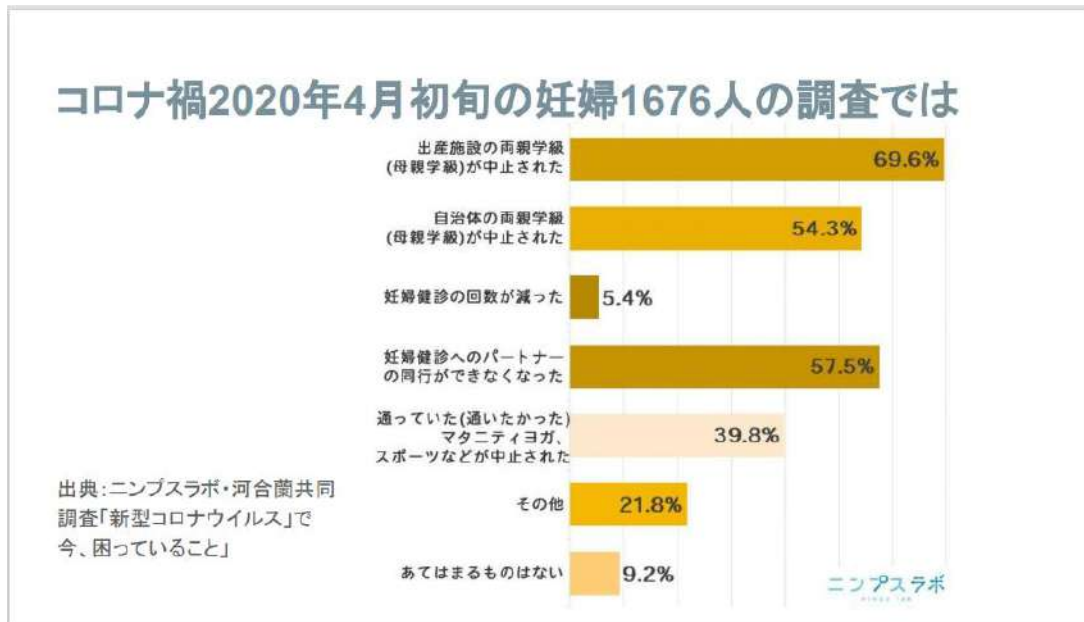
実践の現場からの学び2「里帰りしなくても安心して産み育てられる都市・東京にするために」高橋孝予

高橋：東京里帰らないプロジェクトの高橋と申します。今石本さんの話を伺っていて、すごく重なるところがあるなと思って聞いていました。今日のテーマ的に、私多分今日は一番環境の話をしないんじゃないかなと思っていたのですが、石本さんもそんなに環境の話をしてらっしゃらなかったんで、ちょっと安心しました。私の自己紹介をさせていただきます。私は東京の郊外で生まれまして、家が医療系の両親だったもので、医療関係の仕事をしたいと思って、高校卒業して看護専門学校に入りました。助産師になるルートって色々あるのですが、私は3年間の専門学校で看護師の資格を取ってから1年間助産師学校に行って、助産師になっています。助産師の仕事って何をしている人かというのが大体の方は分からないんじゃないかなと思うので簡単にお話しておく、妊娠・出産・育児、もっと広くは女性の一生のセクシャリティに関係するのですが、妊娠・出産・育児期の女性たちの体の健康を維持する、正常に保つための保健指導がメインの仕事なんですね。何となくお産をとっているイメージがあると思いますし、もちろんそこはその妊娠・出産・育児というプロセスの中の一場面、一番大きなイベントとなるので、ハイライトが当たりやすいんですけど、実はそのプロセス全部に関わっている仕事という感じです。日常生活の中で助産師になぜなかなか出会わないかというと、ほとんどの助産師が病院とか産婦人科クリニックって言われるようなドクターのいるところで働いています。実際に地域にいる人っていうのは結構少なく、開業している助産師が5%ぐらいで、あとは保健センターにいたりという感じなんですね。なので、なかなかまちで出会わないのだと思います。私も同じく御多分に漏れず、大学を卒業した後は大学病院で働いて、勤め人として助産師の仕事をしていたのですが、その病院で働いている時にふと、「お母さんたちって退院して家に帰って、どうやって私たちが言ったことを実践しているのかな」というのがすごく気になったんですね。それで大学院に進学して、特に母乳育児の研究でしたけれど、医療の外側にある、生み育てっていうものに関心を持って研究をしていたので、大学院に行ってから世界の見え方が変わりました。人間関係も色々変わったので、卒業した後は病院にまた戻って助産師として働くよりは、いろんな病院以外の助産の実践に関わりたいたいと思って、子育て広場を町でやってみたり保健センターでちょっと働いたりとか、いろんなことをしています。それが多分今回の活動につながっているのかなと思います。



これは「tagayaso〇〇」という世田谷区にある地域交流・多世代交流をしている時の写真です。今その女性たちがどういう環境にあるかというのを簡単にご説明しますと、妊産婦さんは妊娠したからって特別な人間になるわけじゃなくて、今の自分たちの生活を考えてもらえれば分かと思うんですけど、基本的には自宅には寝に帰っているみたいな感じで、大体は職場と家との往復、まあコロナになって少し変わりましたが、基本的には若い女性というのは仕事を持っていて、家と職場を往復している。人間関係もそんな感じ。なので、自分の身体の事とか何かあった時には、実家の親に相談したりとか、妊娠とか女性の身体のことに関しては経験した事のある友人に話を聞いて、というのがほとんどで、例えば子育てセンターがどこにあるかとか、あまり気にして生きてないと思うんですよ。当然ながらその近所に助産院があるのかとか、保育園がどこにあるのかとか、そんなに気にして生きていない。

そんな人たちが妊娠してまず行くのは病院だと思うんですけど、そこでとりあえず病院に行っていれば「次にこういうクラスがあるからお勉強してください」とか、「保健所に行って母子手帳もらってきてください」とか、そんな感じのことを言われて「あ、そうなんですか」って、言われた通りにまずはやるというのがほとんどだと思いますが、コロナになって、その基本となっていたはずの、病院に行ったら基本的なことを教えてもらえる、保健センターに行ったら基本的なことを教えてもらえる、というのが無くなっちゃったのが今年のことですね。



これは4月の初旬に行ったアンケート調査の結果なんですけれど、今言った通り、妊娠学級が中止になったというのが結構お母さんたちの大きなダメージだったんですよ。

そこで「いろんな情報を得ようと思っていたのに、何を頼ったら良いのだろうか」ってなってしまったのと、病院に健診に行ってさえいればある程度先生に話を聞けたりしていたのが、減ってしまった。間を空けて健診に来ていいよと言われて、専門家から話を聞く機会もなくなってしまったというようなことがありました。

そんな背景もあって、そこから半年ぐらい経ってのこの調査です。昨年10月に筑波大学の松島みどり准教授と助産師が子育てアプリを通じて行った調査で、産後1年未満の母親の24%に産後うつの可能性があるという結果が出ました。これはこれまで10%と言われてきた産後うつの割合の2倍以上になります。先程お見せしたスライドの調査が行われた4月に妊婦さんだった人たちも、10月にはその多くが産後になっているはずですよ。そうした、妊娠中に親になるための準備教育の機会がないまま出産した人たちが、産後に手助けのない子育ての大変さに直面し、うつの可能性が高まることは想像がつかます。

私たちがそんな中でやろうとしていたのが、このプロジェクトなんですけど、妊産婦さんたちが病院で足りなくなってしまった支援（コロナ禍で中止された、病院や自治体の集団指導での両親学級）を、まちにいる開業助産師たちが、個別に行って指導とか、足りない分をやりますよというプロジェクトなんです。地域の助産師というのはもともと保健指導をメインにやっている人たちがかなりの数いるので、両親学級などを行うのは得意なんですよ。自治体でやっている両親学級というのは、実は地域の助産師が依頼されてやっていたりするので、個別にやってくださいとお願いすれば全く問題なく対応できるんですけど、やっぱりその地域に助産師がいることが知られていないので、なかなか助産師が両親学級支援を代わりに行うことができるという情報が届きにくいという現状があります。クラスターも各戸訪問では発生しにくいので、これは私たちの出番じゃないかと思い、5回継続して同じ助産師が行くというのを一つのプランにしてネットワークを組んで開始したというのがこのプロジェクトです。

開業助産師っていろんな種類があるんですね。分娩介助、つまり赤ちゃんを取り上げることを主にやっている人、あとは保健指導だけをやる人とか、色々と幅があるんですけど、そういう人たちでも基本的には産前・産後の保健指導とか身体のケアなんかはみんなできるんですね。ベテランが多いですから、そんな人達 35 人でネットワークを組んだら、公共交通機関を使わなくても都内の大体の地域がカバーできます。

使ってくれた人の声を聞いてみると、本当にちょっとした不安を聞ける場がなかったというのがかなり大きかったです。初産婦さんなどは「何が分からないかが分からない」というような状況ですから、それをこまめに「あの人がいついつ来るからまた聞こう」というふうに解決できたのがすごく良かったみたいですね。初産婦さんは当然想定していたんですけど、経産婦さんの反応をみても、すごく効果あったと思いました。例えば、コロナ禍で保育園に上の子が行けなくなってしまったという人が、自分がまだお産後間もなくてろくに動けないところで、昼夜問わずケアが必要な新生児がいて、その上にさらにお母さんがいつもと違う様子で不安になった上の子がずっと構ってくれという感じになってしまうので、本当に手一杯になっていて、という人が結構いたんですよね。そういう人が、違う大人が入ってきたことでお母さんも上の子も気持ちが少し変わって、5 回終わった頃には落ち着いたというような声がありました。

こうした活動を通して見えたのは、団体名が「里帰らない人応援プロジェクト」なので、里帰りができなかった人を対象にしていると思われがちですけど、里帰れない人って実はこの 4.8% しかいないんですよね。（里帰りを）計画していたけどやめたっていう人よりも、実際には大半の人達がもともと里帰りをする予定はなかったという人が多いんです。東京で里帰りをしないで生み育てるってことは基本的には夫婦二人でとか自分一人でとか、とにかく東京で人に頼らず核家族で育てますっていう方が、これから多分もっと増えてくるんじゃないかなと思います。

ただそういう何もわからない状態で自分の赤ちゃんを人生で初めて抱く人たちが多い状況で、今そういう人たちに寄り添うような体制になってないということを感じています。先ほども言ったように専門家と接点がすごく少ないですね。健診に行ったとき、あとはクラスに行った時しか、具体的なことは聞けないっていう状況ですよ。そうなってくると、結局その人がもともと持っている資本である家族の手助けの多さとか、産後の支援にどれくらいお金が使えるのか、どれだけ正しい情報にアクセスできるかというところの個人差がすごく大きいと感じています。

助産師側の問題としては、助産師って何をしてくれるのか、存在自体が知られていないですね。私達は正常を扱う（＝健康上正常な状態にある妊産婦のケアをする）ので予防的な役割が大きいんです。ドクターは異常になった人たちを治療するのが仕事で、基本的には生活の仕方とか突っ込んで具体的なこと言うのは私たちの仕事なんです。そのせいかどこか助産師さんは怖いイメージがあったりして。私たちがいけないと思うんですけど。なかなか理解されてないので、これからの課題だなと思っています。

何か問題があって病院に行って治療してもらったものは、保険診療でお薬が出たら数百円とか払えば良いし、乳腺炎とかトラブルの手技（マッサージ）に、保険が効くようにもなったんですけど、私たちの仕事と言うのはあくまでも健康な人を扱うので保険外なんですね。そうすると結局病院で治療するよりも高くなる現状があります。そこらへんも助産師に頼るのが難しい理由の一つだろうなって思いますね。

今の世の中というかお母さんたちは、親に頼れない理由が色々あるんですね。高齢での出産も増えてきていますので当然その親も高齢ですし、そうすると亡くなっている場合もあれば、病気、あとはそのリハビリ中だとか介護が必要な状況、元気な方はまだまだお仕事もされていますし、あとはもともと親子関係が悪かった人がいらっしゃるの、もう自分たちで子育てをする上での支援の手を家族内で調達するっていうのはちょっと難しい状況になってきているんじゃないかなと思います。病院とか自治体のサービスというのは、今回のコロナ禍では、特に困った人に優先されるのが原則になっているので、もっと困っている人が出てきちゃうと基本的には健康な人とされている妊産婦さんとか母子は後回しにされてしまいます。なので、非常時っていうのはなかなか公的なサービスが機能しにくいっていうのが今回明らかになったことだと思います。

でもそうは言っても、周りを見ると一地方になると事情が変わってきてしまいますが一東京に関しては、かなりの地域をカバーできるぐらい開業助産師がいます。これは結局お金を払ってサービスを受けるので、公的なサービスとはやっぱり違います。だからといって私たち助産師は、お金を稼ぐためにやっている仕事ではなくて近くにいる人を助けるためにやっている仕事ですので、助けあいという関係なのかなと思います。自助とか公助がだめって言っているわけではなくて、そういうサービスはもちろん使ったらいいんですけど、それに頼れない人、頼れない状況になった場合にもう一つ「共」のサービスというのが大切なんじゃないかなと今回すごく感じました。

最後になりますけれども、これから私たちがやっていくことというのは「日本版ネウボラ」(注：ネウボラ：フィンランド語で「相談の場所」の意)という言葉も最近出てきていますけれども「コミュニティで継続して一人の助産師が、それぞれのご家庭をサポートするってことを広めていければ良いかな」と思っています。最後に一つ、みなさんに胸に置いておいてもらいたい質問があります。「皆さんだったら子ども持つときにどんなサポートがあれば良いですか?」。これについてはまた後でディスカッションの時にも教えていただけたらと思います。ご清聴ありがとうございました。

幡谷：高橋さんありがとうございました。石本さんの女性のエンパワーメントというお話と非常につながる、そして今盛んに政府が「自助・共助・公助」と言う意味での「共助」とは違う、本来の意味での「共助」をご提示頂いたのではないかなと思っています。では続きまして、林良樹さんに登場いただきます。林さんはNPO法人うずの代表。私も実は何度か学生を連れてお邪魔した、千葉の鴨川市の釜沼集落というところをベースに活動されています。もともと千葉ご出身ですけど、色々世界を見てからそこ（釜沼）に居を据えられて、非常に多彩な活動されている方です。お話になることはいっぱいあると思いますので15分で話しかれないかもしれませんが・・・では林さん、お願いします。

実践の現場からの学び3「都市と農村がお互いを支え合う共生社会へ」林良樹

林：皆さんこんにちは、林良樹といたします。今日の中野さんのお話や石本さんのお話や高橋さん

のお話と僕も非常に共感して繋がる話が沢山あります。僕は千葉県鴨川市の里山に1999年、21年前に移住しました。まさに99年のその年に自宅出産したんです。それで子育てってこんなに大変なんだって、インターネットもないしガラケーの時代です。誰も知らない山の中、自然と共に暮らそうと思って、理想の暮らしをしようと思って子育てを始めたら、もういきなりノイローゼみたいな、「助けて！」みたいな。これは子育てこそ未来だし、子育てこそ人生で一番大切なことだと思って、自然の中でそういう生き方をしようと思ったんだけど、いきなり壁にぶつかり周りのサポートもなく、周りはお年寄りしかいない、仲間もない。本当に壁にぶち当たって、コミュニティで育てる事が一番自然なんだって本当に痛感しました。それがきっと人類が長い間やってきた仕事であり、この近現代でそれが崩れてしまって、産業革命以降都市化になり核家族になり、そして公のサービスだったりお金で解決する社会になってきました。そういったもの—仲間の助けがないという大きな壁—は農村でも都市でも同じであって、それを解決するために地域通貨を始めたんです。

お金もないし、仲間もないならば作ろうと。そして2人目の子どもが2002年に生まれた時に、もう限界だと思って地域通貨を始めたんですね。自分を救うために始めたんです。そして同じように困っていた若いお母さんたちが口コミで集まり始めたんです。当時まだインターネットは普及していません。10人で始めて、まずは毎月食事会。みんな赤ちゃんを抱えたお母さんたちが家に集まって食事会をして、そしていない子供服とか絵本とかを物々交換して、物々交換だけど地域通貨使おうか、みたいな感じでそうやってゆっくりゆっくりネットワークが広がっていったんです。当時はファックスです。ファックスでみんなの家にお知らせを流して、来月は何日にご飯持ち寄ってこない服持ってきてねって。それで小さな小さなコミュニティ活動始まったんです。それから18年経って今は200名以上の世帯がコミュニティとなって、そこからいろんな活動が生まれていったんです。自分の家族、自分自身を救うために始めたこのコミュニティ作りが、結果として地域社会の活動、そして都市と農村を繋げる活動に発展してきました。



ここは25世帯の棚田の村です。限界集落70、80が支えているような村です。どんどん耕作放棄地が増えていく中で非常に美しい日本の原風景を守りたいと思うようになり、その仲間たちと

NPO を作っていました。NPO 法人うずという、世界を変えるのは大きなところではなくて、本当にさっきも言ったように個人から家庭からそして地域社会から、小さくてもいいから自分たちができる渦を広げていこうという意味を込めて、うずという NPO を作りました。

そして村に人がいないならば都会の人たち、他の人たちの力を借りようと、村の長老や移住者たちと、都市農村交流、都会と田舎を繋げる活動を始めていきます。まずは村の長老たちが理解してくれて応援してくれて、棚田オーナー制度というのを始めていきます。そこに首都圏 3600 万人の人がいきなり田舎には移住できないので、通える関係性を、「関係人口」を作っていこうという活動を始めていきます。でも鴨川という地方の疲弊のスピードは加速していきます。もうどんどん空き家や耕作放棄地が増えていきます。そこから企業との連携が始まっていきます。2014 年からは無印良品と鴨川里山トラスト、そしてその次の年あたりからは大学との連携も始まっていきます。千葉大国際教養部の実習をお受けして、学生たちは毎年毎月通いながら一緒にお米作りを始めていきます。そういう都市農村交流を沢山やっていく中で、年間 1000 人の人が訪れるような村になりました。

そんな中で今年の台風に遭いました。風速 50m の風が我が家に直撃したんですね。築 200 年近くの茅葺き屋根の古民家にご縁あって住んでいたんですが、もう空爆を受けたように家の中はガラスが割れて、風速 50m が吹き込みめちゃくちゃになり、茅葺き屋根をかけたトタンが全部吹き飛び、もうびっくりしました。房総半島にこういう大型台風が直撃することはなかったんですが一僕は農業もやっているんで、その気候変動の影響というのは本当にひしひしと感じていますが一これは大変なショックでした。ただ非常に美しいんですよ。この茅葺きというのは本当に日本の里山文化循環のシンボルでもあり、地域で共有地に茅を育てて 25 世帯の村、毎年一軒一軒の茅を葺き替えていく。まさに屋根の自給をコミュニティが支えていたんですね。循環型の文化がギリギリ日本の農村には残っている。これを復活させようとプロジェクトが始まっていきます。

同時期に空き家が三軒出てしまいました。我が家の真下と、ひと山向こうにもう一軒、村のど真ん中にもう一軒。村のど真ん中は売り物件です。今日本に 800 万戸の空き家があり、耕作放棄地は滋賀県と同じ面積があり、日本中の地方がどんどん疲弊していく中で、地方の空き家問題がどうしようもなくなってる。この売家も、山つきで農地つきで 800 万円。広大な土地が売りに出されたんだけど、都会の友人や知人にいっぱい紹介しても「そんな山買っても管理できないよ」、なんて誰も買い手が見つからなかったんで、僕の仲間たちで共同購入しました。そして 2 軒の空き家も、移住したいという都会の人たちに引き継いでもらいました。そして、みんなで新しい地域づくりをしていくことにしました。共同購入した山や古民家、そして借りた古民家などの里山フィールドを活かして都会の人たちが来られるような場所を作っていこうと考えました。一つは被災した古民家の茅葺きを再生して行こうというものです。このプロジェクトは今、東京工業大学と明治大学や東京電機大学の建築学科の先生や学生たちと一緒にやっていこうと、彼らに毎週来てもらっています。

ひと山裏の空き家には、横浜から若い家族、一歳の赤ちゃんを抱えたご夫婦が、まずここで子育てをしたい、そして都会の人たちも呼びたいと移住しました。彼らはもともと横浜の 30 人が暮らす国際シェアハウスにいたのですが、都会の人たちが全員地方へ引っ越すことはできないので、そういう都会の人たちを受け入れていく場として「タイニーハウスと食べられる森」を始めてい

ます。

また、ここにはアーティストが良く来ます。例えば TAWOO（タオ）という和太鼓のグループがお米づくりに通ってくれていて、その和太鼓のグループのメンバーがもう一軒の古民家を借りてくれました。お米作りと音楽、そういう「芸術と自然と食」が一体となった暮らしをここで作り、子どもたちや地域の人たちに、太鼓を教えながら、もっと豊かな暮らしをしていこうという「和太鼓の里」というプロジェクトも同時に始めています。

他には「森のようちえん」のプロジェクトもあります。この広大な里山を子どもたちが自由に体験できる環境を作っていこうというものです。

あとは、この棚田の村は棚田しかないんで、この資源を活かして小さな経済活動をつくってきたいので、鴨川市と一緒にどぶろく特区の認定と酒造免許を取って、共同購入した古民家の元牛小屋にどぶろくを醸造するための加工食品場をつくらうと思っています。（共同購入した古民家の母屋はコミュニティカフェ&マーケットや宿泊もできるようにし、アーティスト・イン・レジデンスやシェフ・イン・レジデンス、企業や学生の研修、子供から大人までの学びの場、ギャラリー、講演、コンサート等々、多目的な活動ができるコミュニティスペースにします。そして、人の循環、資源の循環、都市と地方の循環、経済の循環をつくり、暮らしと社会に小さな地球を創造していこうと一般社団法人小さな地球を設立し、共同購入した里山付き古民家は、この法人の所有にします。）これをみんなのコモンズ、みんなの場所にして、一種の遺書のようなものにしていこうと思って、僕が死んでも日本の原風景である里山と農地と古民家というこの財産はみんなに引き継いでもらって、素晴らしい環境なのでそれを次の世代へとバトンタッチしていければいいなと思っています。

僕は千葉県木更津市で生まれ育ち、若いころは東京に住み、アメリカやアジア、ヨーロッパなど世界中の富める国や貧しい国を旅し、日本の農村の価値に気づきました。そして、日本の農村に移り住み、沢山の課題を解決するため、その現場から、都市とも繋がりながら、垣根を超えて、大学・企業・行政・NP0・市民みんなで知恵を共有しながら、次の社会のモデルを、小さなモデルで良いので、この里山で作りたいなと思って活動しています。今日はどうもご清聴ありがとうございました。

幡谷：林さんありがとうございました。林さんのテーマは、いかに都市と農村とを繋いで共生の良い関係を作っていくかということ、それからその小さな循環を沢山作っていくということですね。見せていただいたいろいろな実践の中に、お金を使ったマーケットじゃなくても、これだけ豊かな社会があるんだということがわかりました。それから今、芸術やアートというものも重要だと思っているので、その点についても沢山重要な要素をご提示いただいたと思います。ありがとうございました。それでは第1部の締めくくりとしまして、中野さんにもう一回登場していただきます。お三方のお話しにもつながった先ほどの「健全な社会へ」という問題提起の続きをお願いできればと思います。

問題提起2「地球の健康を考える」中野佳裕

中野：皆さんのお話を聞いて、先ほどの話の続きをすると、まず、人間と社会と地球の健康が相互に依存していること。その相互依存している三つの次元の健康を本来は維持しなければならないのだけど、市場経済のグローバル化はそれらを分断してきたということ。市場原理で社会を統治しようとしてきたことで、これら三つの次元の健康が悪化したというところまで話してきました。加えて今日皆さんと共有しておきたかったことがあって、それは、市場経済のグローバル化がいわゆる新自由主義というイデオロギーとして普及してきたということです。新自由主義イデオロギーの特徴は、社会をつくる方法が市場原理以外にはない、つまり、かつて英国の首相だったマーガレット・サッチャーの表現で言うと、**There Is No Alternative (TINA)**—市場原理以外にオルタナティブはない—という思想を普遍化しようとしてきた点にあるわけです。

そういう思想に基づいて世界が再編されていったときの最大の問題は何かということ、私たちが市場経済に依存する以外のオルタナティブな生活を想像することができなくなるということなんです。イタリアの教育学者／心理学者でレナート・パルマ（Renato Palma）という方がいますが、彼は著書の中で「可能性の感覚（*il senso di possibilità*）」ということを話しています。可能性の感覚とは、人間が生きていく中で様々な問題に直面した際、そこから抜け出す可能性を想像できる感性の豊かさのことを指します。例えば、問題解決のシナリオを可能な限り多く想像できたり、今とは違うオルタナティブな未来を思い描くことができたりする能力のことです。ところが、経済成長を至上命題とする現代消費社会では、学校教育にしろ、職場にしろ、競争と比較を中心に社会生活が運営されていきます。経済競争に勝ち抜くこと、他人よりも市場価値の高いパフォーマンスを発揮することが求められるわけです。そういう社会を作ろうとしていて、子どもの頃から可能性の感覚が狭まっているというのがあるんです。（例えば地球環境破壊をどう解決するかという話一つをとっても、大学で教えていると驚くことがあって、妙に「優等生的な解答」をする学生が増えてきているんです。持続可能な開発の名の下で企業の社会的責任（CSR）を提案したり、リユースやリサイクルを掲げるソーシャル・ビジネスを提案するといったように。学生の話丁寧聞いてみると、どうも勤め人の生活、商品消費する生活、都市的な生活が当たり前になっている人が多くて、生活スタイルも私が子供の頃と比べると画一化されてきているんですね。）だから、問題解決を提案したり未来のシナリオを描いたりする際の想像力の範囲が、市場経済中心の物の見方を抜け出せていない。新自由主義的社会の中で消費することが当たり前の生活になっており、教育をはじめ様々な場面でも市場関係を中心に社会を見ることに慣れきってしまっているんだと思うのです。

もう一つはですね、健康について考える際、それはただ単に医学的な見地で見た我々の心や身体健康だけではないということなんです。イヴァン・イリイチ（Ivan Illich）という思想家が1970年代に非常にユニークな健康の定義をしています。その定義によると、健康とは、人間が自分の生物学的状態と身の回りの環境の諸条件をコントロールできる、そういう自律性がある状態のことなんです。つまり、社会生活を自分達で作る能力を享受できていること、そして、環境と自分たちの身体との間の調整がうまくいかなかった時に、ちょっと立ち止まって考えて、両者の関係をうまく調整し直す、そういう自律的に環境をコントロールできる能力が、人間にとって

の健康なんだとイリイチは言っているんですね。

「可能性の感覚」と「自律性としての健康」、この2つがどう関連してくるかという点、新自由主義社会の中で諸個人の可能性の感覚が縮小する結果、生活を自律的にコントロールする能力も狭まってしまってきているわけなんですね。景気が良い時は市場経済に依存していればなんとかやっていけるけれど、今回のコロナ危機や2008年に起こった世界金融危機のように、ひとたび経済のシステムが破綻すると、雇用にせよ物流にせよ我々は生活する手段を一気に失ってしまうわけですね。そうなるとすぐに、中央政府に何とかしてもらおうという話になります。市場経済に依存するか、国家の政策に依存するかの二者択一しかない。けれども、その両方がうまくいなくなっているときに、我々は本来なら自分たちで直面する生存の問題を、つまり生活基盤を作り直していかなければならないのだけど、想像力の幅が狭まっているがゆえに、それができなくなっているという問題が生じているわけです。

けれども、今日みなさんが話してくださった事例は、ローカルな現場から生活の自律性を回復していく、そういう事例であると思うのです。実際に今回の感染症流行の第一波の際、各国がロックダウンを行っていますけれども、ロックダウンの期間中、世界各地の市民社会の中から様々な社会的実験が現れています。例えば、先進国でも途上国でも、家庭菜園や産直提携による食糧生産のローカル化の動きが現れています。英国ではロックダウン中に家庭菜園を行う世帯が増加しているようです。フランスでは、首都パリを中心に、近郊の有機農家と産直提携を行うアソシエーションへの新規加入者が増えているようです。また、屋内での人口密集を避けるために、屋外での市場（マルシェ）の機能も再評価されてきていますし、インターネットを通じて提携農家から野菜の置き配を依頼するシステムへの加入者も増えています。アフリカでは、例えばウガンダ政府が国民に家庭菜園を推奨しており、西部の農村地域カランビで1990年代から活動している障がい者のアグロエコロジー協同組合が、近郊世帯に家庭菜園のノウハウを教える技術指導を始めています。

医療分野でも欧米諸国では、医者とエンジニアが連携し、3Dプリンターを利用して人工呼吸器の部品を作る活動も見られます。市場経済が機能不全を起こし、国家の政策だけでは十分に問題に対処できない時に、自分たちで生活基盤を創っていくコミュニティ・ベースの実践が各地域社会で現れてきているのです。

幡谷先生が最初におっしゃっていたことですが、21世紀の初頭に世界社会フォーラムに代表される反グローバリズム左派の運動が現れました。それ以降の20年間、世界各地の市民社会の中で広がってきているのが、国家にも市場にも依存しない、第三の自律的な生活基盤としてのコモンズを再生する試みです。2008年に金融危機が起こってからには特に、競争原理よりもコラボレーション、社会的協力を重視する考え方が普及し、共有型経済（シェアリング・エコノミー）や「モノのインターネット（IoT）」を活用した「協働型コモンズ」など、新しいコモンズ構築の実践が現れてきています。21世紀のコモンズは、農村の自然資源を共同管理する伝統的なコモンズとは異なり、情報通信技術を活用して各人の所有物や生活空間、知識や道具を「共有化」する実践を通じて生じています。農村に限らず、都市の中でも共的領域を創る試みです。また、水道事業や学校給食など、新自由主義政策の下で一度民営化された公共サービスを再公営化し、自治体と市民が連携して共同管理していく新しい自治体政治も生まれています。これら現代的なコモンズ

は、都市から農村まで実に広範な地域において、様々な分野において行われており、その方法論も多様化していますので、市場（私）と国家（公）とは位相を異にするコミュニティの領域を再構築するものと考えられています。感染症流行の第一波でロックダウンが起こる中、これまで蓄積されてきた様々なノウハウを活用して自律的な生活基盤としてのコモンズを構築する試みが、世界各地のローカルな生活空間の中から現れてきています。

この現状を踏まえた上でもう一つ、触れておくべきことがあります。これはおそらく次の下郷さんのお話につながると思うのですが、今から6年前にイギリスの『ランセット (The Lancet)』という医学誌で、「地球の健康 (Planetary Health)」という概念が提唱されました。「地球の健康」とは、地球生態系が健全に維持されることが、めぐりめぐって人間の健康を維持することになるという考えです。（従来の医学では、人間の健康を考える際に「公衆衛生 (public health)」という観点、つまり社会環境の衛生が中心でした。この観点から、病院・保健所が整備されたり、上下水道が整備されたり、住環境が改善されたりしてきました。しかし、それではもう不十分だということなんです。なぜなら公衆衛生のパフォーマンスと質はそれを包む地球生態系のパフォーマンスと質に依存するからです。大気汚染や森林破壊などによって地球生態系が悪化すれば人間の生活環境の質は悪化しますし、今回のように新興感染症の流行も起こります。そうなれば、諸個人の心身の健康が悪化します。）

以上のような問題関心から、人類社会は、地球の健康を維持・回復することを今から取り組まなければならない、という議論がイギリスの医学者たちの間からも出てきているわけです。ここで注目すべきは、『ランセット』誌上で公開された「地球の健康—マニフェスト」において、消費社会から抜け出すことの重要性が主張されている点です。地球規模に拡大した消費文明から脱却して、持続可能な文明へと移行しなければならない、と。今回の感染症流行によって消費社会のグローバル化に内在する様々な構造的問題が明らかになりましたが、地球の健康を回復するためにも、消費社会から抜け出すことが必要となってきたわけなんです。

ただ、国際社会の反応を見ると、この転換期において二つのシナリオが出てきています。一つは日本政府のように、従来通りの経済成長主義、つまり消費を刺激することによる経済成長を続けていこうというシナリオが浮上してきています。もう一つのシナリオは、今話したような、人間と社会と地球、この三つの次元の健康を維持していくような脱消費社会への移行を目指すシナリオです。この二つのシナリオの中で社会をどちらの方にもっていくかというのが、これから市民社会で考えないといけないことだと思います。

幡谷：中野さんありがとうございました。今の中野さんのお話とお三方のお話の中で、例えばその「地球の健康」、それから「脱消費社会」のところは、まさに林さんの小さな地区プロジェクト、里山の再生というところに繋がっていきますし、なんといってもその選択の幅を増やすという意味では、高橋さんの報告にあったように、多様な受け皿をみんなで作っていくことで、回復力だとか、危機にあったときの抵抗力を高める—レジリエンスを高める—というところに繋がっていったと思います。消費社会から抜け出すという点においては、ジェンダーの視点とも関わってきますね。世帯の内側からの自律性を高めていくということも非常に重要で、それは石本さんの最初の話に繋がるかなと思いました。

第二部 パネルディスカッション「新しい社会創成の可能性」

幡谷：第二部ではまず、「新しい社会創生の可能性」と題しまして、下郷さとみさんから「ブラジル都市貧困層とアマゾン先住民族による抵抗運動から学ぶこと」という題で、ブラジルでの経験から私たちが学ぶこと、というような形でお話いただいた後、それに各登壇者からフィードバックを一巡していただいたのちに、皆さんの質問にも触れながらディスカッションを進めてまいりたいと思います。それでは下郷さんよりしくお願いいたします。

コメント「ブラジル都市貧困層とアマゾン先住民族による抵抗運動から学ぶこと」下郷さとみ

下郷：こんにちは皆さん。下郷さとみです。フリーランスのジャーナリストです。今住んでいる所は、実は林良樹さんのご近所で、私自身も丸 15 年前に東京から房総半島の南の端っこの鴨川市の里山、本当に過疎の農村地域ですけれども、そちらに移住しました。自分が食べるものは自分で作りたいという気持ちがあったのが移住した主な理由です。ジャーナリストとしては 30 年近くブラジルに関わりを持っておりまして、長らく都市の貧困層による社会運動をずっと取材しています。

ブラジルは、サンパウロでもリオデジャネイロでも、大都市にはもうどこに行ってもいわゆるスラム、ブラジルではファベラという名称で呼ばれている場所があり、様々な社会運動が住民自身の手によって行われています。今年は皆さんもご存じの通り、ブラジルは大変なコロナ危機に見舞われました。貧困層にとっては、もともと非常に大きな社会格差があるところへ、さらに生活困窮が加わってしまったわけですが、この危機に対する様々な力強い運動が展開されています。

それから私は数年前から、東京にある NPO 法人「熱帯森林保護団体(RFJ-Rainforest Foundation Japan)」に協力する形でアマゾン熱帯林保護の活動にも携わっています。RFJ はアマゾン熱帯林を守り、そこに暮らす先住民族を支援するという活動を 30 年に渡って行っている NGO です。毎年 1 ヶ月ほどかけて先住民族の村々を訪ねる支援事業フォローアップの旅に私も数年前から同行しています。

今日、第一部で皆さんのお話を本当に興味深くお聞きしました。最初に中野さんから、自然と折り合いをつけて生きることが壊れてきている、人間の意志の力で節度を作りだしていかなければいけないと、お話がありました。林さんから日本の里山のお話がありました。私は里山とは、人間が自然環境に働きかけて壊さない程度に手を入れる。そこから得る恵みで人が生きて行く。自然の中に人間が居場所と糧を得る。そういう場所が里山であると考えているんですけれども、そういう観点で見ると、アマゾンの先住民族の暮らし、2015 年に初めてジャングルの真ん中にある村に入ったんですけれども、そこで感じたのが、ここも里山だな、ということでした。もちろん日本とは環境もライフスタイルも違いますけれども、自然に対して人間が働きかけて、壊さない程度に手を加えて、そこから糧を得ていくと。そういう人類共通の生き方みたいのがあるとい

うことを感じたんですね。日本の里山にしてもアマゾンの先住民族の暮らしにしても、折り合いがついているんですね。

しかし現代社会の中では、その折り合いがつかなくなっている。そこからいろんな問題が出てきている。折り合いをつかなくさせているものの、その力の一つが新自由主義経済。中野さんからご説明のあったように、利潤をひたすら追求する、そういう経済原理というものが、自然と人間が昔から築いてきた調和を壊して、折り合いがつかない形にまでさせている。

都市化が進む中で人々の孤立も進んでいて、高橋さんからその問いかけがありました。私自身は子育ての経験はないんですけれども、東京という都会で子どもを産み育てていくことが孤独な作業になってしまっているということを、今日お話を伺って感じました。そんな中で林良樹さんからお話があったように、私たちの地域には、子育て世代がたくさん移住してきています。住む家さえ見つければ、もうすぐに移住したいっていう、そういう若い世代が結構多いんですよね。田舎だからこそ子どもを産んで育てられる、助け合いの姿がある、ということを彼らは言っているのですが、何か都会が失ってしまったものがまだまだ残っている場所があると。林さんが言ったように、昔に戻れということではなく、オルタナティブな場所でオルタナティブを新しく作っていくという、そういう息吹が生まれる場所ではないかなという風に感じています。

現代社会では生活者の視点がすごく失われているのではないかなと思うんですよね。特に日本のように性別役割分業意識がすごく強い社会では、生活の部分を担当するのは女性である、ということで、最初の石本さんのご報告のように、女性が何かアクションを起こす時に、まず家を空けられない、もうそこからつまずいてしまうみたいな現実がある。でも、生活をしていない人間は地球上誰一人いないはずなんですよ。生活するということは生きるということであって、生きるということすら性別役割で分業してしまっている。女性という性がそれを担わざるを得なくなっている。そこからいろいろな矛盾が出てきているのではないかなということを、皆さんのお話を聞きながら感じました。

今日のこのシンポジウムのキーワードとしていくつか浮かんだのが、地域の声・力、当事者の声・力、そしてこれまで見落とされてきた女性の視点、つまりそれはイコール生活者の視点ですよ。また、市民の主体性・自律。石本さんが、内発的な力が必要だと最後におっしゃっていましたけれども、まさに自分の中から生まれてくるもの、その自身の声にまず耳を傾ける、そして社会もその声に耳を傾ける。そういうことがなおざりになっているから、いろんな矛盾が存在するように感じます。

また地球の健康ですよ。中野さんからもお話があったように、自然と人間社会との均衡が崩れることで未知のウイルスが、今年の新型コロナウイルスのように登場してしまったと。このような危機は、これからもまだまだ来るだろうということを専門家の人たちは言っているわけで、ではその地球の健康をどう取り戻すのか。清らかな空気、清らかな水、多様性に満ちた豊かな自然。そういう健やかな地球の健康が無ければ人類は生きていけないわけです。それは人間がお金で作り出せるものではない。今この新型コロナ危機によって、薄々みんなが気付いていたことが、ようやく見過ごしてはならないところまで来てしまった。きちんと考え直すためのこの機会をどう活かして行くのか、それが試されているのではないかと感じています。

ブラジルでは新型コロナ危機が本当に深刻なことになりました。11月に入って第二波が訪れて

います。新規感染者数のグラフがずっと下がっていたのが、11月上旬くらいからまた上に向き始めていますが、自粛の気運や規制の措置がすっかり元に戻ってしまっています。今向こうは真夏なんですけれども、みんな外に出て、ビーチなども満員のようです。第二波をどう押さえ込むかという手立てがない中で、本当にどうなっていくのかという状況です。日本でもブラジルの状況は沢山報道されていたので、皆さんご存知かと思いますが、ただ主にボルソナロ大統領の暴言、ちょっとドン引きするような発言がセンセーショナルにワイドショーなどでも取り上げられることが多い。では実際にブラジル社会がどうなっていたのかというのは、なかなか報道されていないのではないかと感じています。

ブラジルもアメリカ合衆国と同じように連邦制の国ですので、州政府の自治権がすごく大きいんですよ。ですから大統領の意思がそのまま国全体で働くわけではなくて、それぞれの州や市の方針としての動きがあります。この新型コロナ危機においては、店舗の閉鎖や外出の自粛など様々に手立てがとられました。人間の行き来する自由が憲法で保障されているので外出禁止にはなりませんでした。街中から人や車が消えてお店も閉じてしまうという、ロックダウンに準ずるような形で感染拡大防止策がとられました。

またホワイトカラーの人たちは3月に入る頃からステイホームでリモートワークに移行したのですが、貧困層の人たちはリモートワークには移行できない仕事についているわけですね。彼らは、「私たちにはステイホームという特権はないんだ」と。ではどうするのか。特にファベラと呼ばれる、いわゆるスラムですけれども、いわゆる三つの密が凝縮したような場所です。狭い路地に小さな家が密集して建っていて、窓もない半地下のような家も多い。換気もない、手洗いするにもしょっちゅう断水がある。狭い家に三世代がひしめいて暮らしているような世帯も多い。リモートワークには移行できない。そのような環境で感染拡大をどう防止していくかというのは非常に困難だったんですね。

ブラジルで初めて感染者が確認されたのは2月26日でしたが、それ以前から、各地のファベラの住民運動のアクティビストたちは、「もしファベラに新型コロナウイルスが入り込めば感染爆発は防げないだろう。だから自分たちの命を守るために何かをしなければ」と、彼らは必死で考えました。

私はリオデジャネイロのファベラに長年通っていますが、リオ市の人口は670万人。そのうち22%がファベラに住んでいます。主に公共の土地ですが、空き地を占拠して家を建てて、やがて集落として形成された場所をブラジルではファベラと呼んでいます。人間は住む場所がないと生きていけません。貧困層向けの住宅政策がほとんど取られなかったせいで、たくさんのファベラができてしまったという経緯があります。

リオ市の統計では市内にファベラが1018ヶ所もあり、最も富裕な地区と最も貧しい地区の1人当たりの所得格差が22倍。まるでひとつの市の中に南北問題が存在するような、それだけ格差が大きな社会です。このような格差社会において、ファベラの人びとがどのような取り組みを行ったのか。それは「抵抗運動としてのステイホーム」でした。「自分たちにはステイホームの特権はない。しかし自分たちの命を守るために、自らステイホームを選び取るんだ」と、家にこもることを選んだんですね。しかしステイホームは生活の困窮、そして飢えに直結する。そこでクラウドファンディングを立ち上げたり、企業や個人から広く寄付を募ったりして、食料や衛

生用品などを困窮家庭に配布するということを彼らはこの八ヶ月間ずっと続けています。



SOS Providência 提供



SOS Providência 提供

このように、リオの近郊農家、これは工業的農業ではない小さな農業、家族農業ですけれども、近郊農家と連携して新鮮な野菜を提供してもらうという取り組みも行われています。また、ファベアーラの住民が市内のホームレスの人たちにお弁当を配食するという活動まであります。寄付を募って購入した食材で毎日炊き出しが行われています。

ファベアーラのアクティビストの友人たちとずっと連絡を取り合っていますが、4月頃にこんな話をしたんですね。当時、日本では緊急事態宣言が出ていて、外出を自粛しろという政府の指示に従うのか従わないのかみたいな議論が日本の社会の中にあった。自由を権力に差し出していいのか、という文脈の中で。そのような話を彼らにすると驚かれました。「従う・従わない」の次元の話じゃないだろう。これは自分たちの命をどう守っていくかという問題ではないのか、と。そう言われて本当になるほどなと思いました。「従う・従わない」の二元論を超える、自分たちは目的をどこに置くのか、そこがまず大事じゃないかと。では目的とは何か。それは自分自身の命、そして周りの大切な人たちの命を守ることだ。生存の権利を守る。そのためには、ではどうすればいいのかと。そういう考えで自分たちは動いているんだ、という話をしてくれたんですね。

日本の政府、菅政権からは、自助があり次に共助があり、それでは立ち行かないならば最後に公助が出てくる、という話があるわけです。でも自助も共助も私たちみんな、これまでもこれからもやってきていることですよ。本来、自助も共助も公助も並行して行われるものである。そして公助とは、政府にお願いをして国に助けてもらうということではない。これは主権者は誰なのかということです。主権者の権利として公助を要求して行くんだ、ということをファベアーラの人たちは言っていたんですね。近年はファベアーラ出身の議員もたくさん誕生していて、地方議会でも国会でも、彼らが議会で貧困層緊急支援のための現金給付法を成立させたりと、そのような動きがたくさんありました。

新型コロナ危機の被害が大きなグループに、都市貧困層のほかにもうひとつアマゾンの先住民族があります。データを見ていると特徴が浮かび上がってきます。自給自足の暮らしが守られている、自然が守られている、そういう場所では感染拡大の抑え込みに成功したということを感じています。食料の主権、つまり自分たちが食べるものを自給自足することの大切さ、また地球の健康を守ることの大切さを実感させられました。ちなみに地球上の生物多様性の85%が先住民族の土地に存在すると言われています。

グリーン経済を構築していく必要があります。今年、新型コロナ禍の真っ只中の7月にブラジルで『新たな時代への新たな経済』という報告書が発表されました。持続可能エネルギーや小さな農業を推進するグリーン経済が国内200万人の雇用と2兆8000億レアル（1レアルは約20円です）の経済効果を生み出すという試算がなされていました。

経済を縮小させて、いろんなものを諦めることで均衡を取り戻そう、昔に戻れ、ということではない。やはり新たなものを作り出して行くということが大事ですし、人間、何か新しいものを創りだしていくって楽しいことじゃありませんか。何かワクワクするというか。しかも、歯車の一つとして生きていくのではなく、主体的に内発的に、自分の中から湧き上がるもので何か新しいものを作っていくという、そういう新しい時代を本当にみんなで作り出していきたいという

ことを感じています。

女性の活躍について、今日、石本さんから女性のエンパワーメントというお話がありました。先住民族社会は男女の役割分業が非常にはっきりした社会なんですけれども、そういう中でも先住民族女性の国会議員が誕生したりと、女性の活躍が目覚ましいです。石本さんのご報告を聴きながら、同じだなと思ったお話がひとつありました。昨年、彼女たち自身の手で第一回先住民族女性マーチを実現した時に、女性は何日も家を空けるということでまず男性の家族や村の長たちからダメ出しが出たと。一年かけて男たちを説得して、それでようやく実現にこぎつけたと言っていました。

ではなぜ女性だけのマーチをやったのかというと、やはり女性は生活を肌で感じているんだと。子どもを産んで育てて、日々家族の世話をして、食べ物の準備をして、今年は雨が少ない、アマゾンの森の乾燥化が進んでいる、魚が獲れなくなっている。そういう日々の生活を、社会の動きを肌感覚で分かっているのは私たちだと。理屈だけの頭の中だけの言葉ではない。ポルトガル語が男たちのようには流暢じゃなくても肌感覚から生まれ出た言葉は人を動かす力があるんだと。だから先住民族女性マーチというのを、どうしても実現させたかった、ということをやっていました。これによって国会が動いたり成果がありました、

人間は誰一人、生活者ではない人は居ないはずですよ。生活者の声を—もちろん男性も含めて—一生きるということを一人ひとりが取り戻すところから本当にスタートしたいなということ、今日は皆さんのご報告を聴きながら感じました。話は以上です。ありがとうございました。

パネルディスカッション 石本めぐみ・高橋孝予・林良樹・中野佳裕

幡谷：下郷さんありがとうございました。お話の中で、いくつか個人的に心に響いた言葉がありました。やはり、新しいことを自分たちが自律的に考えていくということ。それからもう一つその対極にあるのが、今の世の中では生活者の視点が失われているということですね。そこを取り戻すということからはじめなければいけないということ。まず自分自身で内発的に自分の中からどういう生活が幸せとを感じるかっていうところ、そうした点を今少し見失っているのかもしれない。それに気付かされたのがコロナ禍なのかなという風に感じました。

ではこれからパネルディスカッションに入っていきたいと思いますが、まずは登壇者の方々に一人5分ずつ、今の下郷さんのお話と、それから中野さんの問題提起に対しても合わせてフィードバックをお願いできればと思います。オーディエンスからの質問に対するフィードバックを入れて頂いても結構です。では石本さんから。

石本：下郷さんの最後の部分の写真、やっぱり写真の力ってすごいですね。女性たちがあんなに集まって、写真を見て素敵だなんて思っていたんですけど、そこに至るお話を聞いて私は本当にすごいな—と思いました。すごいな—っていうのは、男女の役割分担がはっきりした社会って、もちろんブラジルも、日本も、あるいは世界中に沢山ありますけれど、でもそこを自分たちの力で説き伏せて一年もかけて説得して、その結果があんなマーチだったっていうところに、すごい力

強さがあるし、そうやって説得を自分たちでしたことで、それに付随するいろんなことが、その地域社会自体が大きな変化を起こすもとになったんじゃないのかなと想像しています。そういう感動も覚えつつ、最初のファベラの話は—すごく構造的な格差と貧困の話ですよ—ブラジルの話なのかって思いがちなんですけど、日本もやっぱりファベラほどの—市内の格差が 22 倍って書かれていましたよね—そこまでではないかもしれないけれど、日本の中にも構造的な格差ってというのは沢山生まれてきています。例えば私は女性視点・女性のエンパワーメントっていう活動をライフワークにしているのですが、コロナ危機が始まってすぐに、東日本大震災のことを思い出したってお伝えしたんですけど、そこですぐ着手したのは、東日本大震災の時ではできなくて、ずっと心に残っていたシングルマザーの問題です。被災したシングルマザーは大変困難な状態で、情報が欲しいとかこういうことで困ってますって言う声はありましたが、私たちはまだ立ち上げたばかりでそこまでリーチできませんでした。今回コロナ危機で最初にやったことは、先ほど申し上げた通り、災害救援のようにすぐに食糧を提供するとか物資を提供するとか、それはすごく大事なことです、やはり構造的な課題をどう変えていけるかということも同時にしなければならなかったと思っています。その一助となるためにすぐにやったのが調査チームを作って、シングルマザーのアンケート調査でした。今もやっていて1年間継続的に調査をする予定です。根本的な課題を解決するという時に、こういう問題がありますっていう物語だけで語っても、なかなか人を動かすことはできない。もちろん「食糧支援のために寄付してください」みたいなことはできるかもしれないですけども、データはすごく大事で、それを集めるためにもコツコツと全国のシングルマザーの人たちの声と、今の状況とか金額とかをデータ化するというのを今やっています。ファベラの話聞いて、自分たちが自分たちの抵抗運動としてステイホームをしたっていうこと自体が、それもブラジルで、そういう内発的な自分たちの気持ちを聞いて、それを自分たちでやっていくっていう連帯ができていてすごいなって思って、そういうことを日本ではどういうことが出来るのかなってちょっと思いました。まずはコメントです。ありがとうございます。

高橋：お話ありがとうございました。私もブラジルのことを全然知らなかったもので、今お話を聞いて、そういうコロナ禍で、日本とはまた違う影響の出方っていうのがあるんだなって勉強になりました。私がすごく印象に残ったのが、生活者じゃない人はいないっていうのを何回か下郷さんがおっしゃっていたのと、もう1つがああ最後のスライドにあった自助と共助とあとは主権者としての公助の要求っていうのがすごく響いたというか、そうだなと思ったんですね。

- ・二元論を超える ～ 目的に立ち戻る
目的＝生存の権利
- ・「自助」＋「共助」
＋「主権者としての公助の要求」

(下郷さんの報告スライドより)

私の自分のフィールドに引き付けて言うと、下郷さんのお話で女性たちが助け合ってこれまでも子育てをしてきたというお話、あとは林さんの前半でのお話でもあったように、やっぱりその自分たちで子育てをできるように協力をし合ってくってというのはすごい理想だなと思ってうかがっていたんですね。その一方で私たちはどうしてもお金をもらって、その子育ての支援をするってことになってしまっていることに対して、やっぱりなんかモヤッとするとところも沢山あって、課題だなと思っているところでもあったので、お話を伺っていて考えさせられる所は沢山あったんですね。というのも、里帰らない、里を頼れなくなっている日本の状況というのは、悲観的なところでもないのかなと私は思っていて、これまで前半の石本さんの話でもあったように、女性の無償のケア労働によって子育て支援というのが成り立ってきたというのがあると思うんですね。ブラジルも、もしかしたらそういうこともあるか、後でお伺いできたらと思いますが、やっぱり女性たちが自分たちの権利を放棄してそうしてきたということも、もしかしたらあるのかもしれないと思うと、今こうして東京が都市化して女性たちが自立して外に出られるようになったからこそ、今こうして育児支援をする人がいなくなったという問題が新しく出てきているんじゃないかという風に思っているんですね。そうなった時にやっぱりそれを社会の中で支えていく仕組みづくりっていうのをしていかなきゃいけないんじゃないかということが、このプロジェクトをやりながら思っていたことでもあったので。そこをどう解決していけるかっていうのは本当に今出てきたばかりの新しい話題なのかなと思っていて、先ほどご質問を見ていた時に、金額が私たちのプロジェクト5万5千円は高いとあって、高いと私も言ってしまうんですけど、実際には私たちの助産師が生活をする上で、必要なお金じゃないかなと思っているんですね。というのも2時間プラス前後で行き来したりっていうと、半日をその人一人に使うことになるので、それを一回に対して1万円というのは高いのか安いのかという話になってしまうんですね。私たちはそれを生活の糧にしているっていうのもあって、私たちの生活、私たちも生活者であるっていう視点で、そういう意味ではやっぱり共助、女性たちを助けるけれども、女性たちも私たちを助けてくれないと、生活を支えてくれないといけない、そういう意味で私は共助と思っているんですけど。やっぱりそこが消費っていう視点で見ってしまうと、どうしても高いか安い、良いサービスかどうかとところでふるいにかけられてしまうということもあって、とてもジレンマを感じて

います。それでもやっぱり困っている人からお金を取る仕組みっていうのは難しいところがあると思っていて、そうなった場合にその周りの人たちと、お金の面でも支え合うみたいなことが必要なかなと思ったりして。ブラジルは遠く、日本とは反対側ですけど何かそこがうまくいっているっていうこととか、ブラジルに助産師って仕事の人がいるのかわかりませんが、そういう専門職が女性達にどういう風に支援を行っているのかなっていうことも伺ってみたいとか、色々と考えながらお話を伺っていました。ぜひ伺えればと思います。

林：僕は下郷さんのほんと近所に住んでいるので、ブラジルの話はよく聞いています。最初の中野さんの話と下郷さんの話と、皆さんの話を聞いて感じていることは、僕はこの農村に20年住んで、大きな社会の変化みたいなものをたまにダイレクトに感じるものがあって、それは例えば2008年のリーマンショックの時に沢山の人が農村に来た時のことです。食べ物を作りたいって。ほかには9.11ですね。その時に、もうこの今までの社会システムはおかしいと言ってやっぱり都会から若い人達が移住してきたんですね。次は3.11。そして去年の台風であったり、今回のコロナであったり、こうした大きな社会的なインパクトがある度に、やっぱり今の社会システムに根本的に疑問を感じて、もしくは潜在的に感じていた人たちがぶわっと動き出すんですね。今回のコロナは、今まで以上にこれは全世界という規模で一斉に動き出しているなというのを感じています。自然と人間との共生というのはもう人類の大きなテーマだったかもしれません。そして、そういうことはもう1960年代くらいからずっと叫ばれてきましたが、なかなか社会は変わりませんでした。『成長の限界』って本が出て、沢山の人が、科学者が、ヒッピーもアーティストみんなそれを訴えましたけど、まだまだ一部のことでした。でも今回は、3.11以降、そしてコロナ以降、結構大企業だとかいくつもの大学と連携が始まったんですね。その経済を作る人達、そしてこれからまさに経済社会に学生たちを送り出す大学教育の現場の人たちが、僕のところに来て一緒に研究しようって。答えはないんですが、かといって経済自体が悪いわけではないので、それによってやっぱりいろんな社会が動くので、そこをみんなで新しい経済を作っていく、新しい教育を作っていく、新しい暮らしを作っていく、新しい都市と農村の関係をつくっていく、新しいライフスタイルを作っていく。新しくこれは創造のチャンスだなんていう風にポジティブに捉えていこうと僕は思っているし、それを実際にやっていきたいと思っているんですね。

今までのような成長成長ではない経済システム・社会システムっていうのは、僕はできると思うんですね。今日皆さんで色々話し合っているテーマ、子供であったり出産であったり女性であったり、また都市と農村だったり世界であったり、全部繋がっていると思うので、その繋がりを感じながら、それぞれの現場でそれぞれの分野の人たちが、答えを模索しながら連携しながら、それを共有して作っていける時代だと思って。それは最後に下郷さんが言っていましたけど、その創造というのはワクワクするものだと思うんですね。大変なこともあるし課題も多いんですけど、そういう意味ではダイナミックな時代だと思っていて、それを僕は非常に肯定していてポジティブにこれを乗り越えていきたいなって思って、そういう想いで活動しています。

幡谷：ありがとうございました。では第一ラウンドを締める形で中野先生、ご発言お願いできますか。

中野：オーディエンスからの質問への応答も混ぜながら話していきますが、まず下郷さんの発表の中で一番心に残ったのは、生活者として考え行動するということですね。そこでまず、私の生活者としての原体験からお話しさせてください。私の故郷は、山口県東部の小さな半島にあります。周防灘を臨む伝統的な漁師町で、私の家族はそこで江戸時代末期から和菓子屋を営んでいました。私の代を含め七世代、同じ土地に暮らしてきました。実家は築170年の商家の家屋で、当時の宮大工による建築です。私は1977年生まれで、小学校高学年の時にはバブル経済を経験しています。社会的には消費主義の時代を生きてきたのですが、家庭の中の日常生活には消費社会とは異なる時間が流れていました。家の柱や壁には江戸時代の宮大工の技術が、屋根瓦には地元の伝統瓦職人の技術が残っていました。和菓子職人である父親が使用する菓子作りの道具も先祖から引き継いだもので、江戸時代の度量衡に基づいたものです。使いこなせるようになるには、当時の目方を身体で覚えなくてはなりません。父や祖母からは毎日のように家業や地域の昔話を聴き、様々な生業の存在や伝統行事の由来、それらと周囲の自然との関わりを学びました。小学校高学年まで家には小さな畑がありましたので、野菜も作っていましたし、夕方になれば木材を割って五右衛門風呂を炊くのが日課でした。

消費社会では短いサイクルで商品を使い捨てることが常識となっていますが、家庭生活で使っていた道具や調度品のライフサイクルは数世代にわたるもっと長いものでした。先代から引き継いだ家や道具を台無しにしてはなりませんので、建物の仕組みや道具の特性を良く知った上で、日々世話（ケア）をしなければなりません。また、継がなかったとはいえ、一応、商家の七代目として生まれてきたので、集落の中でどのように振舞うべきか、最低限の作法も幼い頃から学びました。江戸時代に建てられた家屋は半島の地形と気象に合わせて天然の風が吹き込むようになっており、毎日の生活の中で周囲の自然環境の変化を感じ取ることもできていました。集落を歩くと、享保の大火事の後に地元の商家が地域住民のために作った共同井戸の跡や、天保期～昭和初期に地元の網元や漁師が出資して建設した共同波止があり、集落の生活基盤を地元の住民が主体的に作ってきた自治の歴史の一端を伺い知ることができます。

このように地域の環境は幾重もの時間の層（レイヤー）から成り立っています。自然界の物やコミュニティの人々の様々な関係によって自分の存在が成り立っている、その関係性への気配りやケアというものがとても大切なんです。都会の核家族の勤め人の生活を基準にしては、見えないリアリティがあるのです。故郷での生活を通じて私は、地域の自治の歴史、自然の読み取り方、そして生きるために必要なのは勤め人になることではなく生業の技術を身につけることだ、ということを学んでいきました。

また、身体全体を通じて生活をしていると、生活の微細な変化から大きな風景を考えることができるようになります。例えば、21世紀に入ってから、いつも家に吹き込んでいた天然の風が吹き込まないことが増えるようになりました。また、近年真夏に台風が通過しなくなった結果、周囲の海水がかき混ぜられなくなり、海水温度の上昇と漁場の変化が起こるようになりました。地域の歴史を知る父や漁師さんたちから、これがいかに珍しいことで、生業にも大きな影響を与えうる変化であるか、そしてこれが地球温暖化の身近な影響に違いない、という話を聞くようになりました。何世代もその土地の中で暮らしていると、その重層的な時間のレイヤーが身体化さ

れてくるのです。だからこそ、自然や生活環境の微細な変化の中に、もっと長い時間の流れの中での変化、そしてもっと広い地球規模での生態系の変動の影響を感じ取ることができるのです。

現代消費社会のシステムは、私たちの生活を市場原理によって均質化しようとしています。そして金融危機や感染症など、様々な変動が短いサイクルで発生するようになってきています。しかし他方で、私の故郷での生活経験のように、消費社会の周縁には数世代もかけて蓄積されている生活の知恵だとか、文化とか、自然を読み取る身体技術というものが存在していて、そういう地域の中に残る重層的な時間のレイヤーと関わりながら生活することで、消費主義的ではない生活、市場経済に依存しない生活をどう作っていけばよいのかというヒントが得られると思うのです。少なくとも、私にとっては、故郷での生活経験が可能性の幅を広げていく土台になっています。ただ、社会生活が消費社会化していったら、生活の根本までが商品化してしまうと、お金がないと食べ物も買えないとか、電気がないと風呂を炊けないとか、そういうふうに可能性の幅が狭まってしまうと思うんですよね。だから生活者として考え行動するという時に重要となるのは、身体感覚の豊かさだと思うのです。五感を使って、自分が生きるその営み自体を感じ取る。周囲の自然やコミュニティの中における自分の位置や能力や限界を、身体的に把握する。そうすれば、自然の手入れの仕方とか、コミュニティの中での振る舞い方や世話付き合いの仕方、身の回りの様々な道具や伝統技術・現代技術の適切な使い方というものがわかってくる。自助という時、そういう豊かな身体感覚に基礎づけられた生活作りの能力というのが重要になってくると思うのです。生活者としてそういう感覚をもっていたら、そこから他者と協力して共助が生まれて、さらに主権者として自分たちが守るべきものははっきりしてくると思うんですよね。そうなるこそ、主権者として国を変えようとか、政策を自分たちで作っていかうとか、そういう流れも生まれてくると思うのです。だから生活者としての感性を豊かにしていくのは、すごく大事なことじゃないのかなと思いました。

参加者からの質問とフィードバック

幡谷：ありがとうございました。ここからは少しみなさんの質問を拾いながら、私の方で登壇者の方に投げながら、お答えいただこうかなと思います。まず石本さんには、「子ども持ちの女性は子どもを育てているという理由で非常にリスクや新しいものを試しづらいと思うのですが、このような方をエンパワーするのにどのような取り組みをなさっていましたか」と言う質問がありました。まずそこでお答えいただけますでしょうか。

石本：はい、先ほどのグラスルーツ・アカデミー東北のようにそれも含めてほかの講座とか研修も託児を基本的にはつけるようにしています。託児をつけることがなかなかほかの研修では無いので、自分たちがやっていることをアピールすることで、皆さんにそういうことが当たり前というか、こういう風にするといいということを知ってもらうことから始めました。やはり口コミでそういうことが広まるということも大事だなと思いました。実際それに参加してくれた人の、子育て中でも子どもを連れていけるんだよ、泊まりでもいいんだよって言う言葉が力強くて、それ

が迷っている人たちの背中を押していました。本人の経験や言葉はすごく強いんですよね。そうやってもっと学びたいという人たちがここに来られるようになったのかなと思います。ほんの一つ小さな事なのですが、託児をするために、私たちもいろんな資金の調達の仕方をしています。ある時は資金提供してくださるドナー側の女性から「いや、女性は別に子育てが終わってから研修を受ければいいんじゃないの」と言われたりして、「えっ」と思いました。私は女性であっても男性であっても関係なく、子育て中だからこそ見える課題や問題意識もあるし、子育て中だからこそ、それをしながら自分も成長したいという気持ちや希望みたいなものもあるので、そういうことを大事にしていくことで少しずつ変わっていくという風に思っています。

幡谷：ありがとうございます。高橋さんには三つ質問がきていまして、一つは「里帰らない人のサポートは、5回の訪問で55,000円プラス交通費お支払いするというのはかなりハードルが高いんですけど」というようなご質問があって、それについては先ほどコメントの中でお答え頂きました。あと二つ質問がありまして、一つは簡単にお答え頂けると思うのですが、「日本版ネウボラとはなんでしょうか」という質問、もう一つは「コロナの中で助産師の仕事は非常にやりにくくなってしまうと思うのですが、どういう対応がありますでしょうか」というものです。この二つについてお答えいただけますか。

高橋：はい、ありがとうございます。日本版ネウボラっていうのはネウボラっていうのがフィンランド語で、フィンランドでは「相談の場所」という意味らしいんですけど、妊娠が分かったところからその特定の地域の助産師なり保健師が、妊娠・出産が終わって、子育ての最初まで寄り添うような制度になっています。それは全て公費で賄われるので、そこが日本とは制度的にも税制的にも違うところかなと思いますけど、それが日本でもしやれるとしたら、私たちのような開業で、地域でやっている助産師たちがもともと近いことをやってきたので、戸別に担当して、同じ人が行くってことができるんじゃないかなという意味で、日本版ネウボラという表現を使わせていただきました。

コロナ禍で助産師の仕事がやりにくくなったかどうかということなんですけど、実際には私たちはいわゆるエッセンシャルワーカーなので、医療専門職で、飛沫という感染経路、感染対策が分かっているれば、基本的にはその対策を取ってケアを提供するという仕事です。やりにくくは確かなんていないとは思いますが。衛生材料が手に入らないといったことが、やはりピークの時にはありました。

幡谷：ありがとうございました。林さんはすでにチャットへの書き込みによってお答えくださっているのですが、少しご紹介をさせていただきたいと思います。二つ質問があって、まず「都市への集中化が進んでいる中で、限界集落の中で仕事を増やすためにどのような活動をなさっていますか」というもので、林さんからは「子どもから大人までの教育、企業とのトラスト、日本酒などの加工品、エコツアー、アウトドアイベント、村作りツアーなど、地域資源を活用した色々な仕事づくりをしています」というお返事がありました。それからもう一つ「地域で衣食住が確保できるような社会づくりができれば素晴らしいと思うのですが、そうした地域社会づくりは一

人ひとりの人の責任が多くて、昔の村社会のような厳しい結束になってしまうことはないでしょうか」ということに対して、「昔には戻れないので現代文明を取り入れた暮らしにそれぞれができる範囲で、100%自給ではなく小さな自給で良いと思う」と言うお返事なのですが、林さん何か付け加えることはありますか。

林：僕らも昔に戻れないので、ただやっぱり昔日本には素晴らしい文化があったので、その文化を取り入れながらそして現代文明も取り入れながら無理なく、みんなが小さな自給であったり小さな農であったりをするっていうのが広がれば、それは大きな力になると思っているので、そういう意味で僕は沢山の都市住民と一緒に、小さな農、小さなお米作り、小さな自給というのを、あとみんなでシェアする場を作っています。

幡谷：中野さんには大きな質問が出ていますので、先に、下郷さんにいくつか来ている具体的な質問からみてみましょう。これもご回答済みなのですが、「アマゾンで先住民の感染が抑圧されるというのは本当でしょうか。」というもので、お返事として「先住民社会でも感染拡大が深刻ですが、一方で感染が抑制されているコミュニティが散見されると。広大な保護区の森が支える自給自足の暮らしが残っている場所があると。保障された土地が小さく自給自足が崩れてしまっているコミュニティや、ガレンペーロって金の盗掘人などの不法侵入者による違法活動が盛んな街などでは、感染拡大が深刻である。」という内容をいただいています。あと追加で、「学校でブラジルの格差貧困による公衆衛生問題について研究しているという高校生からのご質問です。ファベールの住民組織だけでは補いきれない上下水道や電気などの供給などに政府の介入が必要だと思うのですが、その現状や実態を知りたいです。また格差是正のために最も重要なことは何と考えているか教えて欲しい。」という質問がきています。

下郷：ご質問にいくつかお答えします。先住民族社会における新型コロナウイルスの感染拡大状況について。状況は本当に深刻で、今日の時点で、全国で約4万人が感染確認されており、死者数は880人です。ブラジルの先住民族の人口はおよそ90万人ですから、確認されているだけで約4%の人が感染してしまったと。割合として相当に大きく深刻なんですけど、しかしその中でも感染爆発が抑制された場所があります。そのような場所のひとつが私たち日本のNGOのRFJが支援で通っている地域です。そこには広大な森がcaろうじて残されているんですね。彼らは保護区の境界線を閉鎖・封鎖して、外との人の出入りをシャットダウンしたのですが、自給自足があるからこそそれが成り立つわけです。

そうではない地域では街の物資に依存せざるを得ません。食べ物も生活必需品も外から持ってこないとい生活が成り立たないというコミュニティも沢山ある。それからご質問の中にもあったように、アマゾンの森は地下資源が豊富な場所で、ちょっと川底などを掘ると砂金がいっぱい出てくるような所が先住民族保護区の中にも沢山あるんですね。そのような地域に金の盗掘などの不法侵入者が多数入り込んでウイルスを持ち込んでいます。特にヤノマミ民族が暮らすエリアでは深刻な事態になっています。

ファベールについてのご質問です。1950年代あたりから都市化・工業化が進んで、農村地域か

ら都市に人口が大量に移動して労働力の供給が始まりました。でも行政や雇う側の企業が彼らの住む場所を用意しなかった。それで、やむを得ず空いている土地に人が勝手に掘っ立て小屋を建てて住み、集落が大きくなっていったのがファベラです。ですからファベラができてきた当初からインフラ整備、水道や電気などの整備を求めていく運動というのは本当に長い歴史があります。どのファベラにも日本の町内会的な組織ですけど、住民協会というものがあって、そこが行政との交渉を求めていくと。今は基本的なインフラは大体のファベラには整備されていますが、停電や断水は多いです。

社会格差是正のために重要なのは、やはり教育の機会を拡大していくということですよね。2003年から2016年までの労働者党政権下では、貧困層への大学入試優先枠制度を作ったりして、大学に進学するファベラ出身の若者もずいぶん増えましたし、そういう若い世代の中から地方議員や国会議員が生まれていくという流れもあります。機会が拡大すると周囲にロールモデルがたくさん生まれてきます。頑張れないお前が悪いんだ、という自己責任論が日本でも蔓延していますが、では人間ってどんな時に頑張れるのかというと、こうすればこうなってあんな、あんな人になれるんだというロールモデルが身近に存在しなければ、頑張るモチベーションはなかなか生まれてこないですよ。だからロールモデルが周囲に生まれてくることで活性化がさらに進む、というのがあると思います。

しかし根本的な格差是正には、それでは足りない。ブラジル社会に存在する格差は構造的なものです。国の成り立ちそのものが植民地主義から始まり、それに立脚した奴隷制度が長く続きました。その負の遺産が今でも社会に横たわっている。また富裕層に圧倒的に優位な税制があります。そこにはどの政権も手をつけられていないんですけれども、税制改革などもしっかりやらない限り、根本的な格差是正にはならないと思っています。以上です。

幡谷：ありがとうございました。中野さんあてにきている質問を紹介させていただきます。すでに先ほどのコメントの中で部分的にお返事いただいているところもあるのですが、他の視聴者の方も知りたいと思うので少し申し上げます、「脱消費社会となると具体的にどのような変化が見られますか」という質問、それと関連して「現代社会で子供の頃から可能性が狭まっているということですけど、就職して良い仕事に就く以外の消費社会からの脱却を目指すゴールとは何でしょうか」というもの。まずこれについていかがですか。

中野：先ほど可能性の感覚について説明した時に部分的にお答えしたのですが、脱消費社会への具体的な変化というと、社会的なレベルだと、生活の中に市場経済以外の生活基盤の領域が増えていくということです。特にコミュニティ・ベースで生活の自主管理を行う、自治とコモンズの領域が増えていくということです。だから林さんがおっしゃっていたように、食べ物に関しても小さな自給の領域が増えるとか、身近なところでエネルギーや資源が循環するような、そういう自律的なローカル経済の仕組みを作ることが鍵となります。もっと大きなレベル、つまり文明論的な話をすると、コスモロジーの転換が起こります。脱消費社会は、生物多様性と文化の多様性を尊重する地球倫理の発展に貢献します。

幡谷：それと関連して、「グリーンリカバリーというのが持続可能な社会に向けた新しい社会システム作りの投資の側面になって、その脱消費社会に向かうための投資である」と考える」というコメントを頂いていますが、「二つの道の中庸もあるのではないですか」という質問についてはいかがでしょう。

中野：グリーンリカバリー政策に関しては、様々な思潮を整理する必要がありますね。というのも、グリーンリカバリーは結構危ういコンセプト・政策スローガンで、市民参加型の循環型地域社会を目指す思潮がある一方で、大企業主体の緑の資本主義を目指す思潮もあります。だから、グリーンリカバリーを語る主体が誰で、どういう内容の政策を進めようとしているのかというのを十分精査して評価していく必要があると思います。その上で注目すべき思潮があるとすれば、スペイン・バルセロナの脱成長運動の中で最近提案されている「脱成長型グリーンニューディール」という政策案です。環境分野に投資することによって新たな雇用を創出する。次に、既存の産業部門に環境税などを課税することによって、資本主義的な企業による環境破壊に歯止めをかける。さらに富裕層の資産にも十分な課税をして格差の是正も行う。これら環境破壊と格差を是正するために行った課税を財源に「ベーシック・ケア・インカム」という所得制度を作り、ケア労働者（その多くは女性や移民）の雇用条件や生活条件を改善していく。このように、エコロジーとフェミニズムが融合するような形のグリーンニューディール政策が提案されています。これは、脱消費社会を実現する可能性を持つグリーンリカバリー政策だと思います。

幡谷：あともう一つ、「＜節度のある＞と言うときは一冒頭での問題提起のところでおっしゃったと思うんですが一我慢するというニュアンスも感じられるし、節度というのは高尚な考えのようにも見られる」というコメントがあります。もう少しこれについてお話ししたいという質問が来ています。

中野：先ほど自分の故郷の生活経験の話で触れたことですが、節度の感覚というのは環境に対する向き合い方、あるいは手入れの仕方であり、身体感覚に裏打ちされたものなのです。決して高尚な話ではなく、日々の生活の中で身についていくものです。例えば、実家の和菓子作りの過程を見ても、伝統的な道具を使って手作業で生産しているので大量生産はできません。和菓子の品質を維持するためには作り過ぎてはいけなくて、規模の拡大を目指したら店の経営は成り立ちません。伝統的な技術と身体を使って生産できるその限界内で家業を回し、生活することを覚えなないといけません。また、地元の祝島の漁師さんは伝統的に鯛の一本釣りを行っています。生産性は低いし手間がかかるのに何でそうするかというと、貴重な資源である魚を取り過ぎないようにするためであり、また、地引網より一本釣りの方が魚の質が良いからです。身体を使って生活をしていると、素材や環境との関わり合いの中で「これがいい塩梅だ」「これが限度だ」という節度が自ずとわかってくるものです。それぞれの生業でそういう丁度良いっていう勘所となるポイントがあるんですよ。そのリミットを超えたら、素材や自然とのバランスが崩れるっていう。それが節度の感覚だと思うんですよね。

幡谷：それはさっきおっしゃった生活者の感覚、五感を研ぎすますというそこに繋がるという・・・。

中野：はい、繋がりますね。下郷さんが先ほど紹介していたアマゾンの先住民の生活もすごくよく想像できます。

幡谷：あとお三方全員に関わる質問が三つあります。まず、「三人ともアプローチは異なりますけど、広く捉えると、人びとが健やかに生きる場をいかにして作るかを模索する活動をされていると感じました。」というコメントです。ここでの健やかとは病気をしないという意味だけではなくて、充実感を伴って生きるといった感じでしょうか。これはブエンビビールみたいなところに繋がるのかなと思うのですが、「コロナ禍もあって私自身もそのように健やかに生きたいという思いが強くなってきているのですが、個々人がその一步を踏み出すには何が大切かお三方に一言ずつお聞かせ願いたい。」という質問です。一巡しましょうか。石本さんから。

石本：私たちが開催したプログラムの一つをご紹介します。ベースは山形県の鶴岡の女性たちが始めた「ナリワイプロジェクト」という、地域の女性たちが自分たちの得意なものを生かして地域の課題解決をするとか、それで小さな起業をしようという試みです。参加者はやってみたくて自分が何ができるか分からないとか、自信がないとか最初におっしゃるんですね。そこで、例えば、最初に、自分が思いつく自分の身の回りとか気になる地域の課題をひたすら書き出したりします。あとは自分がすごく好きなこととか、自分が人から褒められて得意だと思うこと。それはもうお金になろうがなるまいが全然関係なく、字が綺麗とかでもいいんですね。そういうことをひたすら書いて全部で 100 個出そうという壮大なワークです。100 個書ける人はなかなかいないのですが、思いつく限り全部書いて、その地域の課題と自分が得意なことがクロスするところが何かというのを見ていく手法があって、それは結構効きます。私もやってみたのですが、自分で書き出しても「うーん」って頭が動かなくなった頃に出てくるものとか、「あれっ」と思うようなことが気づきにもなるので、ぜひやってみてください。

高橋：石本さんがおっしゃったことがその通りだなと思って聞いていますが、私はもう少し小さいレベルの話をさせてもらうと、お母さんたちによくアドバイスをすることで、こうするといいですよって一般的に言われていることの通りにどうしても自分って出来ないこと、赤ちゃんができないことって沢山あるんですけど、なんかその中で色々試したけど自分はこれじゃなきゃ出来ないというものがどうしても生まれてくると思うんですね。だからそこを、自分はこれがいいんだ、これで良いって思えるものが見つければ何でもいいのかってちょっと思ったりしました。それを沢山繰り返していくと、それこそ石本さんがおっしゃったような、何かを達成するってことに繋がってくるのかもしれないなと思いました。

林：僕がその「健やか」というキーワードで感じたのが、繋がるということ。その繋がりのある暮らし、繋がりのある社会というのは自分の心や地域やみんなにとっても非常に充実して豊かな心になっていく。それが自分の健やかさと社会の健やかさがつながっていくようになると思うん

ですね。僕は、テーマとしているのが人と人のつながりであったり人と自然とのつながりであったり都会と田舎のつながりであったり、自分と地球全体のつながり、そういったものを非常に意識して活動しているんですけど、そういう中に自分の喜びと社会の喜びが一致できるような活動が見つけられたら、それは素晴らしいことだと思っています。それは仕事になろうがなるまいが、そういうものが見つけられたらいいのではないかなと思います。

幡谷：いくつかまた個別の質問が出されました。まずお三方に共通する質問があと二つありますが、重なっているかもしれないので一緒に説明します。まず一つは、「根本的に皆さんの事例というのは、真のサステイナブルな社会構築に根ざされている点が共通されているように感じられて感銘を受けた」、そして「中野さんのお話にあったように資本主義社会の深刻な問題が明らかになって、その限界が顕著になる中で、今経済と政治が中心となるという現代社会のいわば過渡期とも言えると思う。そしてその中でそうした側面との兼ね合いで葛藤・困難などがあると思うのですが、どのように向き合ってこられたかというご意見を聞きたい」というご質問です。次に多分部分的には高橋さんが答えていただいたと思われませんが、「共助が重要だとしても国家の役割や責任を再定義しそれを果たすように要求することも重要だと思う。それについていかがお考えでしょうか。」という質問が出ています。石本さんどうでしょう。

石本：そうですね。私たちは3年前にパンの共同加工場を南三陸町に建設しました。ウィでは体に優しいできる限りオーガニックな素材を使ったパンを焼いて販売もしています。建設をする時に資金がかなり必要で。例えば町から創業補助金に応募できますよと言われて、事業計画を立てて持って行ったのですが、その時に根本的な考え方の違いが明らかで、かなり難しかったんですね。この加工場には、地元の女性たちでハードパンや、国産小麦を使ったパンなど、身体にやさしい物を子供たちに作りたい、みんなに食べてもらいたい、という思いを持った人たちが集まってきて、自分でそれをトライアウトできるような共同加工場を建てたかった。なぜならパンの加工場を建てるのは何100万もする、すごく資金がかかるものなので、なかなか個人で挑戦するにはハードルが高いんです。だったら私たちが共同加工場を建てて、それで女性たちが挑戦して、本当にそこから販売できるようになって、それで独り立ちしていけば、地域にとってもすごく美味しくて、体に良いパンが食べられて、売られているようになる。それが出来る人が育っていくってすごく素晴らしい循環だというのが私たちの信念だったんです。ですが、補助金の審査では、これはどうやってスケールしていくんですかと、利益を拡大していく要素がないじゃないですかとかですね、そこがやっぱり一番のところで、事業の採算性が見込めないと難しいと言われて、諦めたんですけど。そこはやはり、私たちにとって何が大事かというところを分かってもらえるところを、資金を集める際もやっていかないといけないんだなって。何度かそういうことにぶち当たって、価値観の違いがあるけれど、私たちもそういう風に行けばよかったかもしれないけど、それは決して私たちの目指すところではなくて、規模の成長は目指してない。むしろ、地域の中で地産地消の良い循環を作りたいということなのです。持続することは大事だけれど、儲けを第一に目指すものではなかったということがありました。

幡谷：はい。では高橋さんいかがでしょう。

高橋：私の場合はもうまさに「その困難の中にいます」という感じで、解決策が見えないところではありますけど、やっぱりそのお金の問題ってすごく戦ったところなんです。いくらに設定するっていうのも高すぎるんじゃないか、逆にボランティアになってしまったら助産師の仕事の価値が下がるみたいな話にもなったりして、結局その折り合いをつけたのが今の金額なんですけど。でもそれだって高いとか安いとか、本当に結局その価値って誰がどうやってつけるのかっていうのが全然わからないのが今の状況です。やっぱり資本主義的な考え方で回していったら、ちゃんとお金になるようにしないと持続しないよって言われながら活動しています。だからこれから先どうやって持続化するかという共存共栄の形を今考えたいところではあります。何か良い案があれば私も聞きたいなって感じです。

幡谷：ありがとうございました。林さんいかがでしょう。

林：行政との関係の課題であったり法律との課題であったり、お金の課題というのは農村部も一緒に、非常に大きな問題で、まさに僕もぶつかっている所です。例えば、農地法も非常に古い法律があったりして、その農地を守るために縛る法律・守る法律が新しいことができなくなったり、そういう意味では法律も一緒に変えていきたいなという思いがあります。行政との関係性も、小さな町だとどこに力が入るかというところで、山間部はどっちかというところやっぱり置いてきぼりになってしまうので、そういう意味では地域の行政との関係も非常に難しいところがあります。でもそれも粘り強くやって行きたいと思っていて、だからこそ一つの小さなモデルを僕は、成功事例を小さくてもいいからつくっていききたいと思っています。

またお金のことも、産業のない山間部の農村でお金を生むっていうのも非常にハードルが高いんですが、今回の共同購入したその里山付き古民家はほぼクチコミクラウドファンディングなんです。僕はNPOでほとんどお金がないので、広大な山と農地と元村長の古民家800万円を、40名の人たちが出してくれました。そういう意味では、みんなでお金を出してみんなで運営していくような新しいシェア経済みたいなものを作っていこうと思っています。その中に子どもたちの教育があり加工食品があり宿泊がありカフェがあり量り売りがあり、みんな一人ひとりがやりたいことを繋げながら、成長はしないかもしれないですけど、みんながそこで生活できるような経済を、みんなのお金みんなの知恵みんなのアイデアでやっていこうと。それは一つのこれからのチャレンジです。そういうモデルを作りながら、行政や法律の人にも目を向けてもらって、みんなが社会を変えていけるような、そういう拠点をつくっていききたいと思っています。

幡谷：ありがとうございました。先ほどの公助も必要ではないかという質問については中野さんからコメントが入っています。「確かに国家の役割も重要」。先ほど主権者として公助について訴えていく必要があるというのは複数のパネリストからお話がありましたけれども、「公助や市民一人ひとりの自立性を高める公共政策や制度作りは必要。バルセロナの脱成長派がベーシック・ケア・インカムを軸とした脱成長型グリーンニューディールを提案しているのはそこに繋がる。」

というコメントをいただいております。これとは別に、重要な質問が入っていますのでご紹介しながらお答えいただきたいと思います。これは石本さんと高橋さんお二人あてなのですが、「お二人が活動で関わる方の多くは女性とか母親だと推察しますが、社会全体の理解を促すために男性に対して何かアプローチされていることがありますか」という質問です。いかがでしょうか。

石本：ありがとうございます。すごく大事な視点ですね。私たちは女性支援とか女性のエンパワーメントを全面的に出すので、対象も女性で関わる人も女性だけだろうという風によく言われるのですが、私たちのNP0は約半数の理事が男性でありますし、関わってくれるボランティアも男性も結構居たりします。関わる側もちろん女性だけでやるのではなくて、ダイバーシティはすごく大事に思っていますし、社会全体の理解を促すためにはというか、本当にアプローチしなければいけないのは女性だけではなくて、男性も含めた社会全体のことだと思っています。なので、直接的にというところでは、東北で活動するときは、地元の町役場であるとか社長さんであるとか、そういうところと協力関係にあったり、一緒に何かをやったり、話し合いができる場を持ったり、表には全然見えたりはしないんですけども、そういう事を大事に、私たちのミッションだと思ってやっていますね。

幡谷：ありがとうございます。高橋さんいかがでしょう。

高橋：はい。私たちの所も運営チーム6人で立ち上げたんですけど、このうちの2人が男性なんです。父親の育児参加にすごく関心が高くて、このプロジェクトをやりたいと言ってくれた人達だったので、結構父親たちをどう育児の場に巻き込むかっていうことを考えてくれています。私たちは今回コロナで、お父さんたちが（母子が）退院してからじゃないと会えないみたいな状況になったこともすごく心配していて、実際に医療現場だと母子っていう単位になっちゃうのでお父さんってどうしても外側に置かれがちだったんですけど、そこをあえて家庭に入っていくことで家族を一単位としての指導を打ち出して、男性が当然のように場にいるっていう雰囲気を作っていきたいなと思っているところではあります。

幡谷：ありがとうございます。林さんに、多分時間が限られていたので十分お話いただけなかったと思うのですが、「あわマネー」について、その地域通貨の取り組みが気になったので少し補足していただきたいという質問があります。

林：はい。2002年に通帳型の地域通貨というものを作りました。



地域通貨もいろんな種類があるんですが、「あわマネー」は南房総の安房という地域を中心としてそこに住んでいる人たちが「あわ」という単位で行う取引のことです。最初はインターネットがなかったんですけど途中からインターネットが導入されたのでメーリングリストや Facebook で情報交換します。こんなふうはこの房総半島にいろんなモノやサービスが回ってるイラストがかいてあります。あわマネーは人と人を結び地域循環の輪を作るコミュニケーションツールです。モノやサービスを交換し、お互い支え合いながら信頼に基づいたコミュニティを育てていきます、っていうのが目的で、現在の貨幣のように貯めることが目的ではなくて循環させて、そして人と人がつながることなのです。これによって僕たちも本当に子育て中に助けられたんですね。やっぱりこういう人とのつながり、そして信頼関係があるということが暮らしを豊かにし、精神的にも安定し、そしてコミュニティが作られ、そのコミュニティから地域に必要なプロジェクトが生まれていく、これがネットワーク型コミュニティとなり、創造のネットワークになっていきました。そんな活動を今も続けています。今日も移住者の若者が入りたいと言って入ってきました。彼は都会から来て、この里山で森のようちえんをやりたいと。だからこれからネットワークを作りたいんですって。なので、是非このコミュニティというかネットワークに入れてくださいと言ってきました。「あわマネー」は、どんどんそういうネットワーク作りに役立っていると今でも思います。

幡谷：ありがとうございます。今チャットで入ってきたご質問は、「お金の存在と離れてどういった経済があり得るか」ということだと思います。「お金がない社会、また新たな性質を持つお金の社会の可能性を伺いたい」というのはまさに今のお話しにつながるのではないかと思います。林さんのお話しは、関係性を創ってゆき、その信頼関係の中でみんなが助け合いをするためのしくみ、というようなことではなかったかなと思います。

林：はい、そうですね。目に見えるお金の流通とは別に、もう一方では目には見えないけれど信頼関係による助け合いの流れができると考えています。

中野：人類の歴史を振り返ると、通貨には大きく分けて二つのタイプが存在します。一つ目がフィアット型通貨と言って、資本主義と近代国家の成立と共に制度化された通貨です。各国の中央銀行が発行している信用型の通貨で、利潤追求を目的に使用されます。フィアット型通貨は経済格差を生んだり、資本の自己増殖を生んだりする原因となります。これに対して、林さんが取り組んでいらっしゃる地域通貨は、信頼ベース型の通貨です。コミュニティの中の社会関係、特に人々の相互信頼をベースに流通するお金であって、利潤追求を目的としません。性質が異なるという事ですね。

幡谷：はい。ありがとうございました。そろそろまとめに入って行きたいと思います。最後に入った質問と、あと私の印象とも関わるのですが、今日のお話を伺っていて、「生活者の肌感覚で生まれた声が人を動かす」という点が大切だったように思います。これは下郷さんの話であって、皆さんからもそれに共鳴するコメントがあったと思うのですが、他方で、例えば日本の都心に住む場合、都市の肌感覚から生まれた声で人々が共鳴する場をつくっていくというのはなかなか難しいのではないかなと思うんですね。そういった場づくりに何かご提案があったらどなたかお答えいただければと思います。

下郷：私こそが当事者である、そういう当事者意識が希薄になってしまっているんじゃないかなと思うんですね。自分自身が当事者である現場の一つ持つ、それってすごく大事なことです。そんなに大げさな話ではなくて、例えば都市農村交流のプログラムに参加してみると。単に観光客で訪れるのとは全く違うんですね。自分から何らかのアクションに参加していくということで、それは一つの当事者の姿です。

それから誰でも、今日今からすぐにでも当事者になれることがあって、それは今日何度もお話ししたように、生活者になるという事ですね。このコロナ禍でリモートワークが非常に普及して、例えば男性の会社員の人が家庭の中で仕事をする。食と住が一体化するすごく大きな変換点だったわけですね、このコロナ禍というのは。そこで、自分は生活者であるというところを、ではその人たちはいったい自身の中でどう意識化したのかというところに私はすごく関心があります。

人間、生きている誰もが生活者であるはずなのに、それを第三者に丸投げすることで成り立っているこの社会というものが、いろんなひずみを生み出しているわけですね。だから今日、今から、自分が生活者になる、と。家事を手伝いますよ、ではなくて。手伝うというのは当事者ではないですから。他者のものである家事を手伝ってあげる、ではなくて自分が生活の一員となる。そういう当事者感覚を本当に今から持っていったらいいんじゃないかな。

最後の方で中野さんがおっしゃっていた、身体感覚、五感というものを取り戻す、というのは、そういうことじゃないのかなという気がしています。生活の中で、また環境の中で自然の中で、そのような身体感覚が今、すごく希薄になっているのではないのでしょうか。身体感覚が希薄になればなるほど、何か怪しげなスピリチュアルみたいなものがブームになっていくんですね。生き物としての身体感覚、自分の中から内発的に生まれてくる声、何を自分が求めているのか…。そこを忘れては人間として生き物としてよくないんじゃないかなという気がします。

あと、海外の事例を知ることのメリットの一つは、日本の自分たちの足元を見つめ直す機会になるというのがあります。日本の社会で当たり前のように言われている言葉を一つひとつ疑ってみる作業というのも大事じゃないかなと思うんですよね。例えば先ほど私の方でお話した、政府の外出自粛要請にしても、それに「従う・従わない」というのはどういうことなんだろうとか。国に面倒を見てもらうのか、という話にしても、はたして国というのは市民の面倒をみる存在なのか、では主権者って一体誰なんだ、とか。そういうことを一つひとつ疑っていくのが大事だなと思っています。

先ほど、自律というのは依存先を増やしていくことだ、というお話がありましたけれども、日本の人はなかなか他者に頼れないというのがありますよね。日本に住んでいるブラジル人の友人と話していると、日本の人に「手伝いましょうか」と声をかけると「ご迷惑だからいいですいいです」って断られるけど、なぜ？と本当に不思議がられるんですけども、迷惑か迷惑でないかは、言ったその人が決めることじゃないですか。なのにこちらから「あなたにご迷惑だからいいです」と言って関係性を最初からシャットダウンしてしまっている。では、人に迷惑かけるとはということなのとかね、一個一個そういう思考実験みたいのをしてみるといいんじゃないかなって思います。

幡谷：ありがとうございました。ではこれから皆さん一言ずつ、何か今日のディスカッションの中で一番自分がインスパイアされたことを一言ずつお願いしたいと思います。石本さん先ほどのテーマに繋げてコメントをお願いします。

石本：まずご質問への答えから。私たちのプロジェクトの1つで「ローカル女子と未来をひらくプロジェクト」というのがあります。ローカルと名前をつけたときに、東北のローカルだけではなく、日本全国のローカルというのを頭に描いて考えました。その時に、じゃあ都会はどうなのかという議論もありました。都会というイメージがあるけれど、それをばらして行くと一つひとつが実は小さなローカルじゃないか、地元っていう小さな単位で行くと、自分の徒歩圏内の範囲で考えると、下町もあるし、そんな都会都会してたりはしない。東京全体を考えるとすごい大都会と思うけれど、でも小さな単位で考えるとそうでもないんじゃないかということで、そこも含めてのローカルを考えました。なので、自分の周りのローカルで考えるとできることとか、そこにあること、関わってみられることってもう少しあるんじゃないかなと思います。

今日参加されている方のなかには学生の方も多いと聞いたので最後にお伝えしたかったのは、やっぱりこのコロナの禍で学生をしているってとても大変だったんじゃないかなとずっと思っていました。学校に行けないとか友達に会えないとか友達が作れないとか。オンライン化されることでいいこともあるけれど、人とつながりを生むということをしごくやりたいのにやれないということで、心を痛めたんじゃないかと思います。ただ一つお伝えしたいのは、こういう非日常とか大変な時というのは、何が本当に自分にとってあるいは人にとって、生きることに、本当に大事なものは何なのかということを考える機会であるとも思うんですよね。なのでこういう機会を、大変だ、では終わらず、自分のこれからの人生とか、今の自分がどう生きたいかということも含めて、是非そこを考えることでこの先の世の中がきっと変わっていくんだと思っています。

す。

幡谷：滑り込みでもう一個質問があったのでそれも交えてもしお答えいただければ。「新しいことを始める際必ず旧来のやり方を通して側からの反発があると思いますが、それをどう乗り越えてきましたか」というものですが、それについて石本さん伝えることってありますか。

石本：震災後はいろんな反発はあるんですけども、特に女性支援を掲げるとなかなか難しいところがあるんですが、何を言われても何があっても対立しないということだけを決めていました。やっぱり反発はしますよね。自分たちが思っていることと全然違うことが飛び込んできたり、コントロール出来ないと思うと、反発されると思うんですけど、そこはできる限り何を言われても説明に行くとか、私たちはこういう風にやってますってこちらからちょっとオープンにしていくなとか、そういう工夫をしていました。

幡谷：はい。ありがとうございます。では高橋さんいかがでしょうか。

高橋：はい、私も今石本さんが言っていたことが心にザクザクと刺さって、説明をしていくって大事だなんて思って聞いてました。今日はこのシンポジウム全体を通して学ぶことばかりで、何か一つって言われるとちょっと絞り切れないなって言うぐらい沢山のことを学ばせて頂きました。他の方の活動しているお話しからもこれから先どうしたらいいのかと考える時の参考になりましたし、まさに先ほど石本さんおっしゃっていたように、都会、東京、ローカルっていうのも、私はそれこそ東京で育ったし、東京の事しか実は分からないので、東京でずっと見ているからこそその東京の特徴みたいなのがやっぱりわかっているような気もするんですよね。先ほど下郷さんがおっしゃっていたように、人に頼るのはとても苦手なんです。他の地域のことは正直わかりませんが、東京の人は特に人に頼るイコール良くないことみたいなことがすごくあって、こちらからむしろお願いして行かないとサービスを使おうともしないというようなことも結構あるので、やっぱりそこでその関係性を丁寧にするとか、上から支援をするっていう感じじゃなくて、一緒に何かお手伝いしたいですっていう形で伝えていくのが、すごく大切なことだなんて思っていたところでした。先ほど下郷さんのお話をいただいて、本当にその通りだなんて思いました。これからの活動のキーポイントにもなるのかもしれないなんて思って伺っていました。本当にいろんな学びがありました。ありがとうございます。

幡谷：林さんどうでしょうか。若い人へのメッセージでも構いませんし。

林：僕もこういう保守的な農村でいろんな活動をしているので、叩かれることはたくさんあるんです。でも、出過ぎた杭になってしまおうと思っているんで、本当にみんなが良いと思っているし、自分が本当にやりたいってことは粛々と続けていけば形になるし、その歩みはとてもゆっくりでもとにかく行動し続ける、そして振り向くと「あ、形になっていた」って。そうするといつの間にか仲間も増えるし、理解者も増えていく。僕も石本さんと同じように戦わないんです。も

う最初から負けちゃうし、でも戦わずに勝てるんです。そうして自分の信じる道をコツコツコツとやっていけば必ず社会は変わると思っているし、一人ひとりの力は小さいけれども力はあると思っっているんです。日本の社会では自分の、一人ひとりの力はちっぽけだっみんな思っっているかもしれないし、何もできないやっ世界を変えることもできないと思っっているかもしれないけど、僕はそんなことちっともなく、小さな村のやっぱり一無名のNPOでも渦は起こせるんだと思っっています。危機が起きれば起きるほど僕はチャンスだと思っっているし、人間の創造性が発揮できる時だと思っっているんです。この世界規模で人類共通の危機を僕らは共有しているんで、まさに僕らの創造性が発揮できる場所、時だと思っっているんで、学生の皆さんもがんがん行きましよう。

幡谷：ありがとうございます。中野さんと下郷さんから一言ずついただければと思います。下郷さんどうでしょう。

下郷：今日は本当に楽しかったです。地域の小さなローカルな動きというのは、ささやかなものです。私たちもアマゾンでは、あの広大な面積の中の限られた地域の限られた民族と小さなプロジェクトをやっいて、そんなことをちまちまやっいてもアマゾンの問題は解決できないでしょう、なんて講演会で質問されることもあります。それはその通りなんですけれども、でも、大きな問題を一気に解決してみせます、というのはあり得ないことです。しかし今のブラジルの大統領は 2018 年の大統領選の時に、ブラジルが抱える様々な問題を私が当選すれば一気に解決してみせる、という言葉で人の心をつかんだんですね。実体のない抽象的な、しかし勇ましい言葉で人の心をつかんだわけです。

もちろん、理念とか理想とか、根本的に大切なことというのはグローバルに皆が共有すべきものです。社会的公正や人権、地球の健康、それらの意識が共有されてさえいれば、あとは本当に個々の、一つ一つの地域の小さな取り組みを成功体験として積み重ねていくのみだと思っっています。そういう小さな粒が寄り集まって、こうありたいという世界ができていく。もうそれしかないと思っっているんで、今日はそれぞれの地域で活動されている皆さんのお話が聞けて本当に良かったです。なにか勇気がわいてきました。

幡谷：ありがとうございます。では中野さん一言お願いします。

中野：世間ではいろんな情報、いろんな言説が飛び交っっていますが、私にとっては故郷の生活経験という常に戻るべき原点があっ、それがあるからこそ世の中の言葉に流されずに立ち止まって考えることができます。故郷の豊かな自然とその生命の不思議に触れて生きてきた経験、魚や鳥や虫など様々な生き物が季節の変化と共に生まれては死に、何度も巡り巡ってきた、そういう生命の循環に触れてきた経験。そして地元の宮大工や瓦職人、実家の和菓子職人の伝統技術、漁師の技術や海や風を読み取る能力、そして七世代にわたる家族の歴史とそこから知り得た故郷の歴史と文化、それら有形・無形の生活の知恵に日常的に触れてきたということ、それだけはもう絶対にブレないです。だから世の中が混乱し危機に陥った時は、常に自分の人生の原点に立ち帰

って物事を考えるようにしています。世の中にはいろんな言葉が氾濫していて、またいろんな考え方が乱立していて、迷ったり流されそうになるかもしれないけれど、そういう時に私は、刹那的な消費社会を超えて何世代も持続する故郷の生活の文化的基層に立ち戻って、生活者として今をどのように導くかを考えています。(そういう原点をもつことって、政策に訴えかけるよりもずっと大切なことだと思うのです。皆さんにそのような原点はありますか？ 是非、探してみてください。)

私は英国留学時代に反戦運動や反グローバリズム運動などのストリートデモに参加していました。権力に抵抗するデモって市民的不服従の意志表示としてとても重要なのですが、エネルギーを使う割には政治も社会もすぐには変わらないし、やっぱり疲弊しちゃうんですね。そういう時に、自分の足元に自律的な生活基盤があると助けになる。サバイバルしていくための拠り所になるし、そういう生活感のある領域から生まれる関係性やアイデアって、とてもクリエイティブかつ革新的だったりするんですね。だから、生活者として行動するということがすごく大事です。そこはブレてはいけないところだなと思いました。

幡谷：ありがとうございました。最後にモデレーターとして、とてもまとめきれないのですが、皆さんのお話で一番心に残り、今日の収穫だったと思うことを述べたいと思います。何度も出てきましたけど、この機会に生活者としての感覚を取り戻そうということではなかったかなと思います。よく with コロナで新しい生活様式というふうに言われていますけれども、本当はもっとコロナの前にあって私たちが失ってきた、それこそ職場と自宅との間の往復だけで毎日毎日過ぎていったような感覚から、もう一回生活者として、それから自分の内なる声に向き合い、本当に何をやりたいのかとか、どういう環境が自分の求めているものかというのを取り戻す機会にする時なのかなということを感じました。

それからもう一つ、「レジリエンス」ということにつながると思うのですが、行政とか公共政策に働きかけることは本当に必要だと思うんですが、逆にその「自助・共助・公助」という言葉が独り歩きしてしまっている中で、今日私が一番学んだのは本当の自助というのは自立すること、オートノミー（自律性）を持つということと、それから共助についても、生態学的な意味でのレジリエンスに対して、多様な支えがたくさんあるという意味での共助が必要であって、それを踏まえた上で公助に対して働きかけをする、そういうことが必要なのだと改めて思いました。

そして最後に、一番元気をいただいたのは、新しいことを作っていくっていうことにワクワクしようということです。コロナ禍でただでさえ下を向きそうになります。学生さんもそうですけど、大人たちも多分そういう状況にあると思いますが、この先新しいことを考えていこうという気持ちをもつことが大切。そのために何が必要かということを今後も皆さんと考えていきたいと思います。そのきっかけを今日いただいたし、深掘りもできたと思います。ご参加くださった皆様からも非常に有意義な質問をいただきまして本当にありがとうございました。そして登壇者の皆様も長時間ありがとうございました。

Designing the Future after Globalization: Reflections on New Social Practices in a Time of Pandemic

